

都城市文化財調査報告書 第76集

Umekitasadobaru Site

梅北佐土原遺跡

—臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007年1月

宮崎県都城市教育委員会

序 文

本書は、「臨時地方道整備事業」に伴い、都城市教育委員会が実施した梅北佐土原遺跡の発掘調査報告書であります。

都城市は、平成18年1月1日に高崎町、山田町、高城町、山之口町の北諸県郡4町と合併し、新都城市が誕生いたしました。この合併に伴い人口は17万人を超え、市域の面積は宮崎県内で最大を誇ります。また、この新しい市域においても、数多くの文化財が残されています。

本書に所載いたしました梅北佐土原遺跡は都城市の南西部、梅北町に所在しております。周辺には中近世の寺院跡である西生寺跡など、文化財が多く残っています。今回の発掘調査では、中世と縄文時代の遺構・遺物が見つかっており、古くは7千年以上も前の縄文時代からこの地で私たちの祖先が生活を営んできたことが分かりました。

本書がこうした地域の文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査作業に従事して頂いた市民の皆様、発掘調査にご理解・ご協力頂いた周辺住民の方々に対し、心より厚く御礼申し上げます。

2007年1月

都城市教育委員会
教育長 玉利 讓

例 言

1. 本書は、「臨時地方道整備事業」に伴い都城市教育委員会が平成 18 年度に実施した梅北佐土原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化財課主事山下大輔が担当した。
3. 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の 2万5千分の1『都城』と『末吉』を基に作成した。
5. 現場においての遺構実測は、作業員の協力を得て山下が行った。
6. 本書に掲載した遺物の実測および遺構・遺物の製図は山下が行った。
7. 遺構・遺物の写真撮影は山下が行った。
8. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
9. 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001 年度前期版を参考にした。
10. テフラ分析等の自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。
11. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、集石遺構を 1/20、溝状遺構および土坑を 1/40 とした。遺物実測図は土器・陶磁器類が 1/3、石器を原寸とし、各図版に示している。
12. 本書の執筆は第 4 章の自然科学分析については株式会社古環境研究所に執筆を依頼した。それ以外の執筆および編集は山下が行った。
13. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。
14. 遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。
SD: 溝状遺構 SS: 集石遺構 SC: 土坑（縄文時代の陥し穴状遺構については JSC とする）
SP: ピット

本文目次

第1章 序説	1	3 包含層出土の遺物	9
第1節 調査の経緯と経過	1	4 その他の土器	15
第2節 調査組織	1	第4節 中世の遺構と遺物	16
第2章 遺跡の位置と環境	1	1 溝状遺構	16
第1節 地理的環境	1	2 土坑	18
第2節 歴史的環境	2	3 包含層出土の遺物	19
第3章 発掘調査の成果	4	第4章 自然科学分析	23
第1節 調査の概要	4	第1節 梅北佐土原遺跡における	
第2節 遺跡の層序	5	テフラ分析	23
第3節 縄文時代の遺構と遺物	7	第5章 まとめ	29
1 陥し穴状遺構	7	第1節 縄文時代早期の遺物について	29
2 集石遺構	7	第2節 中世について	30

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1/50,000)	2	第11図 縄文時代早期土器分布図(1/400)	14
第2図 調査区域図(1/1,000)	3	第12図 縄文時代早期石器分布図(1/200)	14
第3図 縄文時代・中世遺構分布図(1/400)	4	第13図 縄文時代晩期土器実測図(1/3)	15
第4図 調査区土層断面図(1/100)	6	第14図 中世遺構実測図①(溝状遺構、1/40)	16
第5図 縄文時代陥し穴状遺構実測図(1/40)	7	第15図 中世遺構実測図②(溝状遺構・土坑、1/40)	17
第6図 縄文時代早期集石遺構実測図(1/20)	8		
第7図 縄文時代早期土器実測図①(1/3)	10	第16図 中世遺構実測図③(土坑、1/40)	18
第8図 縄文時代早期土器実測図②(1/3)	11	第17図 中世遺物実測図(1/3)	20
第9図 縄文時代早期石器実測図①(1/1)	12	第18図 梅北佐土原遺跡	
第10図 縄文時代早期石器実測図②(1/1)	13	テフラ分析土層柱状図	28

表目次

第1表 縄文時代早期土器観察表	20	第6表 梅北佐土原遺跡における	
第2表 縄文時代早期石器計測表	21	屈折率測定結果	27
第3表 縄文時代晩期土器観察表	22	第7表 梅北佐土原遺跡に関するテフラの	
第4表 中世遺物観察表	22	放射性炭素(¹⁴ C)年代と暦年較正年代	
第5表 梅北佐土原遺跡における		テフラ検出分析結果	27

図版目次

図版 1 梅北佐土原遺跡の調査 ……31	図版 4 中世の調査 ……34
1 調査前風景（西から）	1 調査区東側遺構（SC1～7） 完掘状況（西から）
2 重機による表土剥ぎ作業	2 SD1・2、SC8・9 検出状況（北から）
3 調査区東側土層堆積状況	3 SD1・2、SC9 土層断面（北から）
4 調査区西側土層堆積状況	4 SC8 土層断面（北から）
5 調査区西端土層堆積状況	5 SD1 完掘状況（西から）
6 調査区中央土層堆積状況	6 SD2・SC9 完掘状況（北から）
7 中世遺構検出作業風景	7 SD3 完掘状況（西から）
8 XII層掘り下げ作業風景	8 SC8 完掘状況（北から）
図版 2 縄文時代の調査① ……32	図版 5 出土遺物① ……35
1 JSC1（陥し穴状遺構）検出状況（北から）	1 縄文時代早期 I 類土器①
2 JSC1（陥し穴状遺構）土層断面（北から）	2 縄文時代早期 I 類土器②
3 JSC1（陥し穴状遺構）完掘状況（北から）	3 縄文時代早期 I・II 類土器
4 SS1 検出状況（南から）	4 縄文時代早期 III 類土器
5 SS1 掘り込み断面①（北から）	5 縄文時代早期 IV 類土器
6 SS1 掘り込み断面②（北から）	6 縄文時代早期 V・VI 類土器
7 SS1 掘り込み完掘状況①（北から）	7 縄文時代晩期土器①
8 SS1 掘り込み完掘状況②（南から）	8 縄文時代晩期土器②
図版 3 縄文時代の調査② ……33	図版 6 出土遺物② ……36
1 SS2 検出状況（北半分・南から）	1 縄文時代早期の石鏃
2 SS2 検出状況（南半分・南から）	2 縄文時代早期の微細剥離のある剥片
3 I 類土器（右・1）・III 類土器（左上・7） 出土状況（北から）	3 縄文時代早期の剥片
4 I 類土器（2）出土状況（北から）	4 縄文時代早期の石核・原石
5 II 類土器（5）出土状況（南から）	5 中世の土師器
6 III 類土器（8）出土状況（東から）	6 中世の陶磁器
7 III 類土器（6）・石鏃（19）出土状況（北から）	
8 石鏃（20）出土状況（東から）	

第1章 序説

第1節 調査の経緯と経過

都城市は、生活道路の整備を推進して地域住民の生活安定に寄与することを目的とし、臨時地方道整備事業の一環として都城市梅北町西生寺 335 号線の道路拡幅工事を計画した。それに伴い、平成 17 年 10 月に都城市土木課（現道路公園課）から事業予定地内における文化財所在の有無についての照会が同市教育委員会にあり、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地（梅北佐土原遺跡）の範囲に含まれていたため、平成 17 年 11 月 17・18 日に確認調査を実施した。調査は 2×2 m ないしは 1×2 m のトレンチを 4 箇所にて設け、人力により掘り下げた。その結果、対象地の東側に設定した 3・4 トレンチにおいて縄文時代早期の土器、土師器、礫などが出土し、遺跡が遺存していることが判明した。この確認調査の結果を受けて、土木課と文化財課で協議を行い、本工事により遺跡が破壊される部分約 300 ㎡については、事前に記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。現場での発掘調査は平成 18 年 5 月 8 日から平成 18 年 6 月 30 日までに行い、それに並行して出土遺物の水洗・注記・接合作業を市教育委員会文化財課で行った。現場での発掘作業終了後、引き続いて報告書の執筆・編集作業を行った。

第2節 調査組織

平成 18 年度の組織（発掘調査実施および報告書作成年度）

- | | | | |
|----------|---------------------------------|-----|-----|
| ・調査主体者 | 宮崎県都城市教育委員会 | | |
| ・調査責任者 | 教育長 | 玉 利 | 讓 |
| ・調査事務局 | 教育部長 | 今 村 | 昇 |
| | 文化財課長 | 高 野 | 隆 志 |
| | 文化財課課長補佐 | 新 宮 | 高 弘 |
| | 文化財課副主幹 | 矢 部 | 喜多夫 |
| | 文化財課事務嘱託 | 押 川 | 涼 子 |
| ・調査担当者 | 文化財課主事 | 山 下 | 大 輔 |
| ・発掘調査従事者 | 榎木ハナ、立石カズ子、橋口みどり、東 春雄、福丸秀則、坊地トミ | | |
| ・整理作業従事者 | 大坪真知子 | | |

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回発掘調査の対象となった梅北佐土原遺跡は都城市梅北町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央部を占める。平成 18 年 1 月 1 日には高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡 4 町との合併により、新都城市が誕生した。この合併に伴い人口は 17 万人を超え、市域は約 650 ㎢ に及ぶ。面積は宮崎県内で最大である。

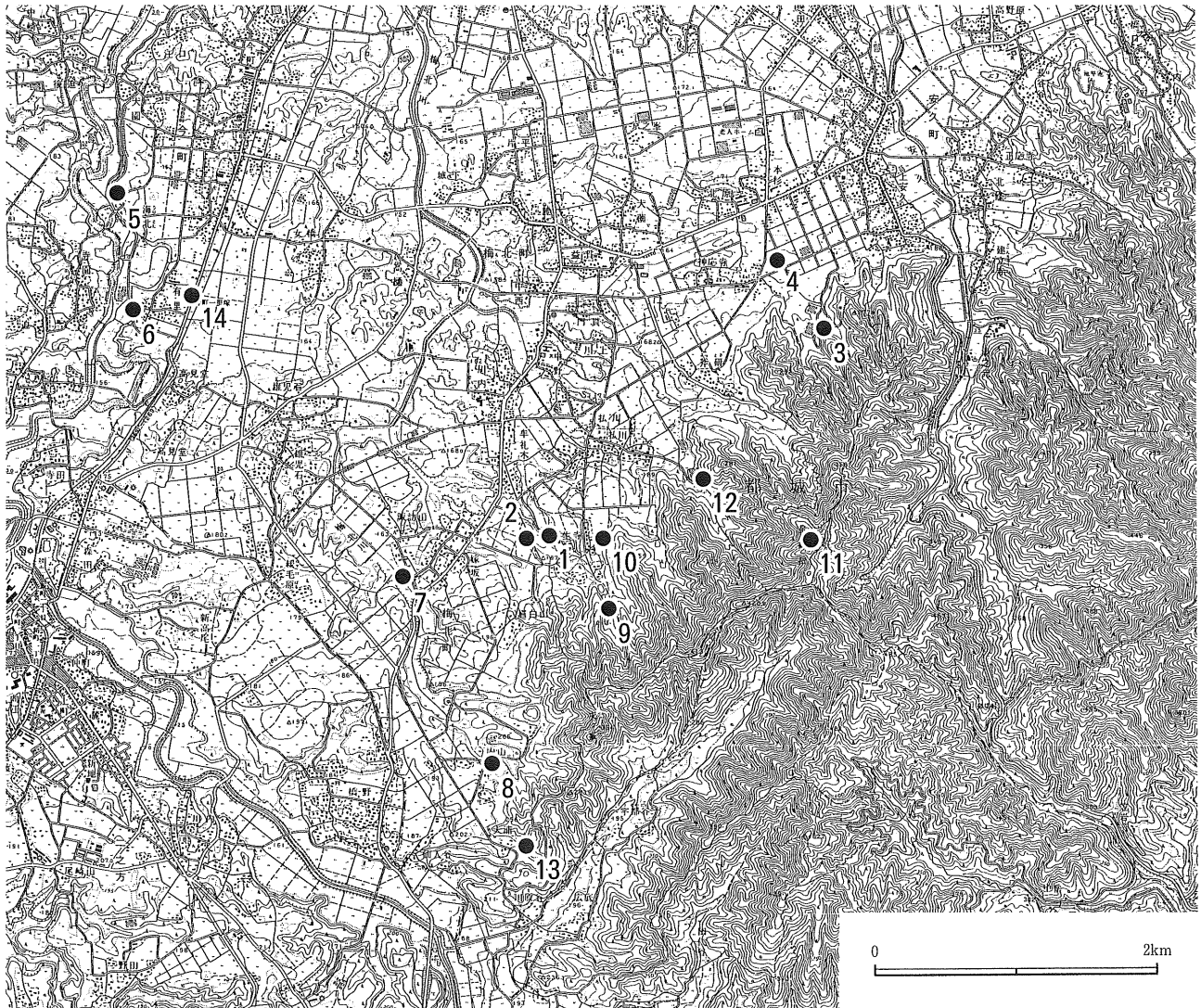
都城市が位置する都城盆地は、南北約 25 km、東西約 15 km の楕円状を成している。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。梅北佐土原遺跡は、市城南西部に位置し、鰐塚山系南端部の金御岳（標高 472 m）から派生する標高約 195 m の台地縁辺部に立地する。当遺跡の立地する台地上と市街地との標高差は 40～50 m 程である。現在、調査地の周辺は畑地・水田が広がっており、遺跡の西側には西生寺 335 号線と接続して

広域農道が東西方向に走行する。さらに西側には、この広域農道と交差して県道飯野松山都城線が市中央部から鹿児島県側に向けて延びている。

第2節 歴史的環境

本遺跡の位置する梅北町周辺では、これまで多くの遺跡が確認・調査されている。以下、時代を追ってこれらの遺跡を概観し、本遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。

本遺跡の所在する梅北町周辺では、大岩田町に位置する^{おおいわだかみむら}大岩田上村遺跡で旧石器時代の細石刃石器群が出土しているが、それ以外に旧石器および縄文時



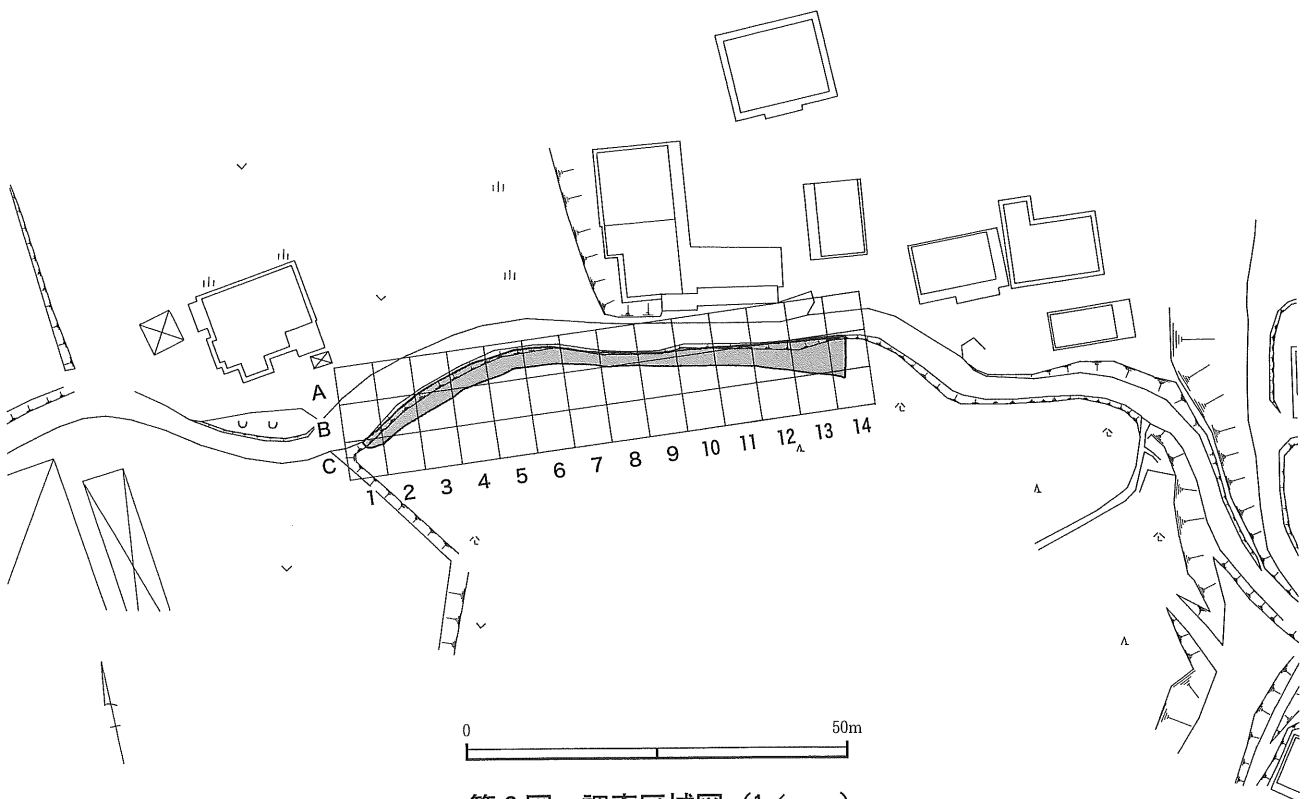
- | | | | |
|-------------|-------------------------|-----------|------------|
| 1: 梅北佐土原遺跡 | 2: 梅北佐土原遺跡(県埋文センター調査地点) | 3: 王子原遺跡 | 4: 王子原第2遺跡 |
| 5: 坂ノ下遺跡 | 6: 鴉尾遺跡 | 7: 嫁坂遺跡 | 8: 大浦遺跡 |
| 9: 西生寺跡(中世) | 10: 西生寺跡(近世) | 11: 金御岳遺跡 | 12: 勝軍院跡 |
| 13: 千手院跡 | 14: 今町一里塚 | | |

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

代草創期の遺跡は確認されていない。**梅北佐土原遺跡**は、平成10年度に広域農道建設に伴い宮崎県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施されている。調査地点は今回調査を実施した地点から西へ約150mのところと位置している。ここでは、縄文時代早期の集石、後・晩期の遺物が検出されている。この他、縄文時代の遺跡として、後・晩期の竪穴住居跡や土坑といった遺構や、前～晩期の土器が出土した**王子原遺跡**が挙げられる。王子原遺跡では量は少ないが、古代の遺物も出土している。王子原遺跡から北に500m程離れた**王子原第2遺跡**や**嫁坂遺跡**、**大浦遺跡**などでも後・晩期の遺物が出土している。また、**緩毛原第2遺跡**では縄文時代前～後期・中世の遺物が採集されている。弥生時代の遺跡としては、竪穴住居跡を検出した**大浦遺跡**や**坂ノ下遺跡**が挙げられる。中世の遺跡を列举すると、水田跡・道路状遺構・溝状遺構などが検出された**嫁坂遺跡**、畠跡が検出された**坂ノ下遺跡**、水田跡と畠跡が確認された**鴉尾遺跡**などがある。先述の王子原第2遺跡からは中世の道路状遺構も検出されている。この他、中世の砦跡といわれる**金御岳遺跡**も周辺に位置している。さらに、梅北佐土原遺跡から東に400mほどのところと南東へ600m程入ったところには、中世～近世の寺院跡である**西生寺跡**があり、さらにこの時代の遺跡としては、**千手院跡**・**勝軍院跡**も挙げられる。また、県道269号線沿いに位置する**今町一里塚**は近世の道標であり、国指定の史跡に登録されている。このように、市域南部の台地縁辺部では縄文時代～中世の遺跡が数多く確認されている。その中でも特に中世の寺院跡が多いことが、この地域の大きな特徴といえよう。

【参考文献】

- 都城市教育委員会 1987『都城市遺跡詳細分布調査報告書(市内南部)』都城市文化財調査報告書 第6集
- 都城市教育委員会 1997『大浦遺跡』都城市文化財調査報告書 第37集
- 都城市教育委員会 2004『王子原第2遺跡』都城市文化財調査報告書 第66集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『梅北佐土原遺跡 中尾遺跡 蓑原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001『王子原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第45集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡 畑田遺跡 嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第63集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『鴉尾遺跡 坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第65集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『大岩田上村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第77集



第2図 調査区域図 (1/1,000)

第3章 発掘調査の成果

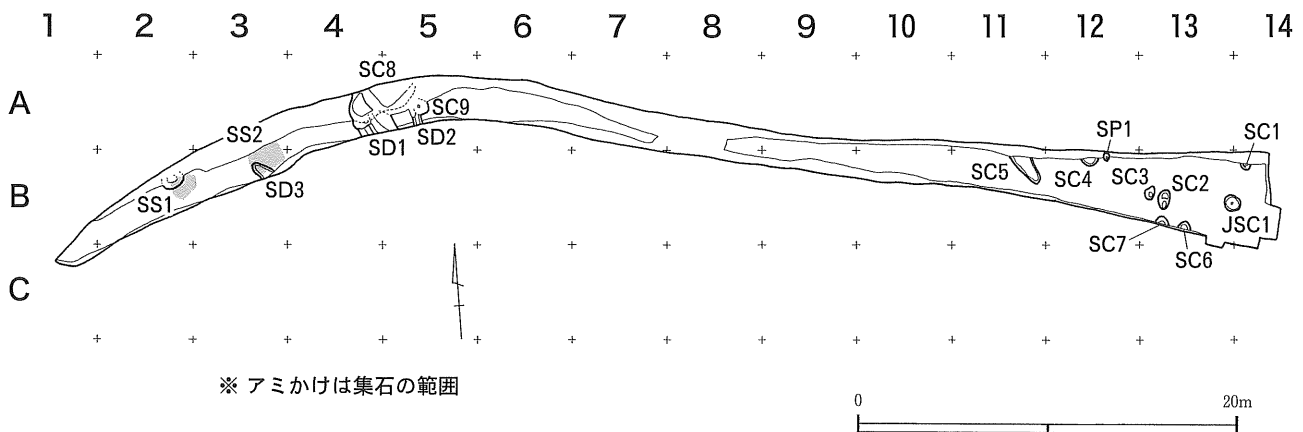
第1節 調査の概要

調査対象地は市道西生寺 335 号線の南側に位置し、調査前は竹林であった。標高は道路面より平均で 2 m 程高くなっている。工事計画は現状の幅 2 m の道路を 4 m に拡幅するもので、基本的には拡幅する 2 m 分を竹林のある南側に広げる計画であるが、部分的には道路幅 4 m 分について竹林を削平して新設する範囲も認められた。そのため、この道路拡幅工事により削平を受ける竹林部分に関し、確認調査により遺跡が遺存していることが判明していた全長約 70 m にわたり発掘調査を実施した。

調査区は東西に約 70 m、南北に幅約 1～4 m の細長い三日月状を呈する。重機での表土剥ぎの際には、調査中の崩落を防ぐため調査区の壁は法面で残した。そのため、事前に設定した調査区の範囲よりも実際の調査面積は小さくなっている。調査区の設定にあたっては、公共座標軸系の SN 座標線に一致した 5×5 m を 1 区画とし、東西方向を西から 1、2、3... の順に算用数字で、南北方向を北から A、B、C の順にアルファベットで表記した。この組み合わせで区名を付けた。

まず、対象地の竹林の伐採後、重機による表土剥ぎに入った。事前に実施した確認調査では、調査区東側では表土直下で遺物が出土しており、遺構・遺物が遺存している可能性が考えられた。そのため、表土のみを重機で剥ぎ取り、それ以下は人力で掘り下げ、御池軽石上面での遺構検出を試みた。調査区中央から西側にかけては、表土直下が無遺物層である基本土層 VI・VII 層やアカホヤ火山灰層であったため、これらの層も掘り下げて縄文時代早期の遺物包含層直上まで掘削を行った。一部表土剥ぎの際に遺構が確認された範囲については、東側同様に表土のみを剥ぎ、表土の直下で精査を行った。その後は人力による包含層の掘り下げおよび遺構の検出を行った。

調査区東側および西側の一部においては、重機での表土掘削作業の際に御池軽石上面で土坑などの遺構が数基確認されていたため、これを精査した。その結果、調査区東側で中世の所産であると考えられる土坑が 7 基、西側では溝状遺構 3 条、土坑 2 基が検出された。これを記録に留めた後に調査区東側では再度重機を導入して御池軽石およびアカホヤ火山灰層を除去した。2 度目の重機導入後は、縄文早期の遺物が出土すると考えられた基本土層 X～XII 層を人力により掘り下げ、精査を行った。その結果 X 層下部から XII 層にかけて土器・石器・礫などの遺物が出土した。特に調査区東端の B-11～14 区周辺からは、土器や黒曜石製の石器類が集中して出土している。西側では土器・礫が若干出土したものの、石器は 1 点も出土しなかった。遺構に関しては、調査区東端で縄文前期ないしは中期の陥し穴状遺構が 1 基検出されたのと、西側で縄文早期の集石遺構が 2 基検出されたのみであった。調査区の土層断面を観察すると、これらの遺構以外にも土坑などの遺構がいくつか存在していたものと思われるが、西側は表土に加え火山灰層も重機で掘り下げたため、平面的に検出することはできなかった。



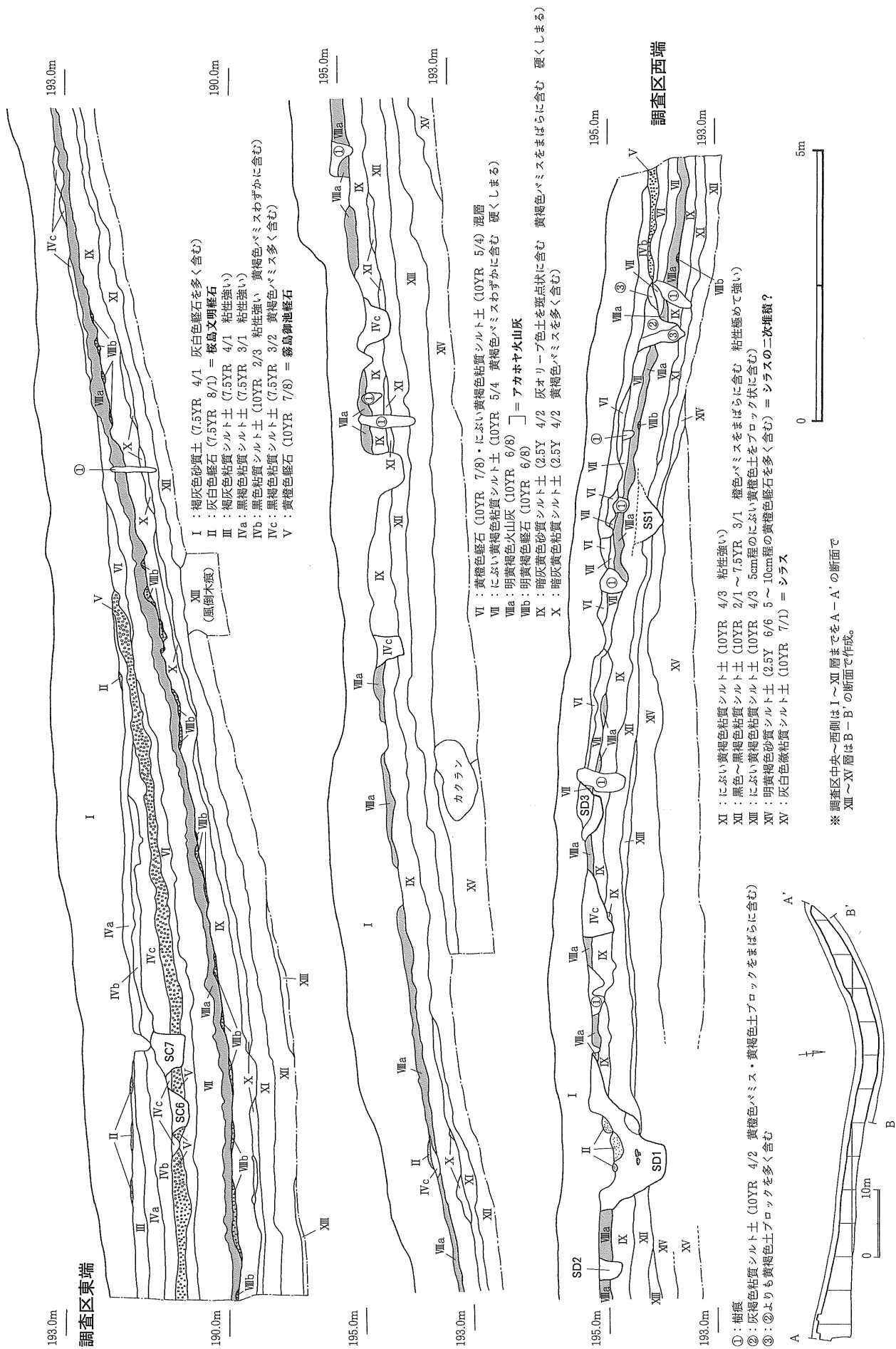
第3図 縄文時代・中世遺構分布図 (1/400)

第2節 遺跡の層序

梅北佐土原遺跡の地形をみると、B-4 杭付近の標高が最も高く、そこから西および東に傾斜してゆく。特に東側の傾斜は急で、その高低差は最大で 6.1 m を測るほどである。土層の堆積状況もこの地形の起伏に沿っている。

- I 層 … 褐灰色砂質土(表土。灰白色軽石を多く含む)
- II 層 … 灰白色軽石(文明軽石層)
- III 層 … 褐灰色粘質シルト土(粘性強い)
- IVa層 … 黒褐色粘質シルト土(粘性強い)
- IVb層 … 黒色粘質シルト土(粘性強い。黄褐色パミスをわずかに含む)
- IVc層 … 黒褐色粘質シルト土(黄褐色パミスを多く含む)
- V 層 … 黄橙色軽石層(御池軽石層。上部は粒状で下部は硬くしまる)
- VI 層 … 黄橙色軽石・にぶい黄褐色粘質シルト土混層(御池軽石とシルト土が混ざる。硬くしまる)
- VII 層 … にぶい黄褐色粘質シルト土(黄褐色パミスをわずかに含む。硬くしまる)
- VIIIa層 … 明黄褐色ガラス質火山灰(アカホヤ火山灰層)
- VIIIb層 … 明黄褐色軽石(アカホヤ火山豆石・軽石層)
- IX 層 … 暗灰黄色砂質シルト土(オリーブ色砂質シルト土を斑点状に含む。黄褐色パミスをまばらに含む。非常に硬くしまる)
- X 層 … 暗灰黄色粘質シルト土(黄褐色パミスを多く含む)
- XI 層 … にぶい黄褐色粘質シルト土(粘性強い。縄文早期遺物包含層)
- XII 層 … 黒色～黒褐色粘質シルト土(橙色パミスをまばらに含む。粘性極めて強い。縄文早期遺物包含層)
- XIII 層 … にぶい黄褐色粘質シルト土(5cm程のにぶい黄橙色土をブロック状に含む)
- XIV 層 … 明黄褐色砂質土(5～10cm程の黄橙色軽石を多く含む)
- XV 層 … 灰白色微粘質シルト土(シラス)

I 層は表土層で、多量の白色軽石(文明軽石)を含む。厚さは地点により異なるが、概ね 0.5～1.2 m となり、東側では特に厚くなる。II 層は 15 世紀後半に噴出したと考えられる文明軽石層で、調査区全体で遺存しているものではなく、調査区の東側の一部でわずかに遺存していたのみである。最も厚いところでも 5 cm 程と極めて薄くブロック状に堆積している。III 層は褐灰色粘質シルト土である。遺物は出土していないが、中世の堆積土であると考えられる。IV 層は黒色土で中世の遺物包含層である。色調・粘性の強弱・含有する黄褐色パミスの量などから分層が可能で、より黒味を帯び粘性が強く黄褐色パミスをわずかに含むものを IV b 層とした。調査区東側の御池軽石上面で検出した遺構の多くがこの IV b 層を埋土とするものである。IV c 層も同様の黒褐色土であるが、黄褐色パミスを極めて多く含む。V 層は黄橙色軽石層で御池軽石に相当する。調査区東側および西側端のみで遺存している。VI 層は黄橙色軽石とにぶい黄褐色粘質シルト土が混じる層である。硬くしまる。遺物は出土していない。VII 層は御池軽石とアカホヤ火山灰に挟まれた層で、調査区東側と西側端の一部のみで堆積している。この層が堆積した時期は鍵層となる火山灰との前後関係から縄文時代前期ないしは中期であると考えられるが、遺物は出土していない。遺構も調査区東端でこの層を埋土とする陥し穴状遺構が 1 基検出されているのみである。VIII 層は明黄褐色火山灰層で、アカホヤ火山灰に相当する。調査区東側および西端で良好に遺存している。直径 5 mm 程で最下部に堆積する火山豆石・軽石は区別し VIII b 層とした。IX 層は径 5 cm 程のオリーブ色土が斑点状に混ざる層で、非常に硬くしまる。IX 層は調査区の東側と西側で若干質感が異なる。東側では硬くしまるが、西側に向かうにつれ若干しまりは弱くなり軟質になる。黄褐色パミスを多く含む。X 層は IX 層と見た目は近似するが、オリーブ色の斑点はみられず IX 層に比べ軟質である。X 層中には橙色を呈す軽石が多く含まれている。この軽石はテフラ分析によると桜島嫁坂軽石(P11)である可能性が高く、IX 層と X 層の境には一部ブロック状に点在している状況が窺える。XI 層はにぶい黄褐色を呈す粘質シルト土で粘性が強い。縄文時代早期の遺物包含層である。調査区東側および西端に見られる層である。礫・土器・石器類が多く出土しているが、礫の出土



第4図 調査区土層断面図 (1/100)

量が圧倒的に多い。Ⅻ層は黒褐色粘質シルト土で粘性が極めて強い。縄文時代早期の遺物包含層である。Ⅻ層は調査区全域で確認できるが、地点によりやや質感および色調が異なる。調査区東端では黒味・粘性ともに極めて強く、茶褐色・黄褐色パミスが含まれる。当層中からはⅪ層同様に礫・土器・石器類が多く出土しており、特に調査区東端では黒曜石片・土器片ともに多く出土している。出土状況からは、Ⅺ層とⅫ層の接点から特に多く遺物が出土する傾向にあることが分かる。Ⅹ層はにぶい黄褐色粘質シルト土で、調査区中央から東側においては黄褐色土をブロック状に含む。遺物は出土していない。Ⅳ層は明黄褐色砂質土で、直径 10 cm 程度の黄橙色パミス（シラス塊）を多く含んでいる。シラスの二次堆積であると考えられる。Ⅴ層は灰白色微粘質シルト土で、シラス層である。

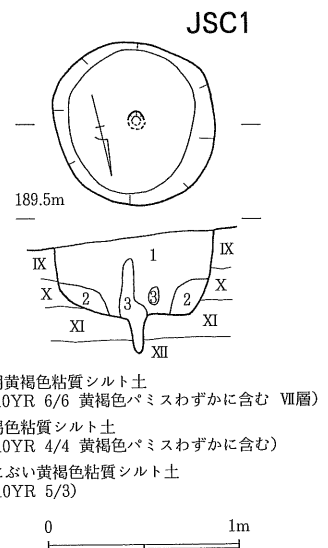
第 3 節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、前期ないしは中期の所産と考えられる陥し穴状遺構が 1 基、早期の所産である集石遺構が 2 基検出されている。この時代の遺物としては、早期の土器・石器・礫が包含層から出土しており、晩期の土器が中世の遺構内から出土している。以下、それぞれの遺構および出土遺物について報告する。

1 陥し穴状遺構

JSC1 (第 5 図)

B-14 区のⅨ層中で検出された径 0.8 m を測る円形の陥し穴状遺構である。2 度目の重機導入後に精査を行った結果、ほぼ正円形を呈する土坑を検出した。検出面はⅨ層中であつたが、実際の掘り込み面は少なくともⅧ層よりも上位であり、遺構の深度はさらに大きいものと考えられる。検出面からの深さは 0.45 m を測る。埋土には基本土層のⅦ層が堆積していることから、縄文時代前期ないしは中期の所産と考えられるが、遺物が出土していないことから帰属時期を特定することはできない。底面および断面に腐植土が堆積した逆茂木跡と考えられる痕跡が観察できたため、陥し穴の可能性が高いと判断した。Ⅸ層中で検出された遺構は当遺構のみであり、遺物も出土していない。



第 5 図 縄文時代陥し穴状遺構実測図 (1/40)

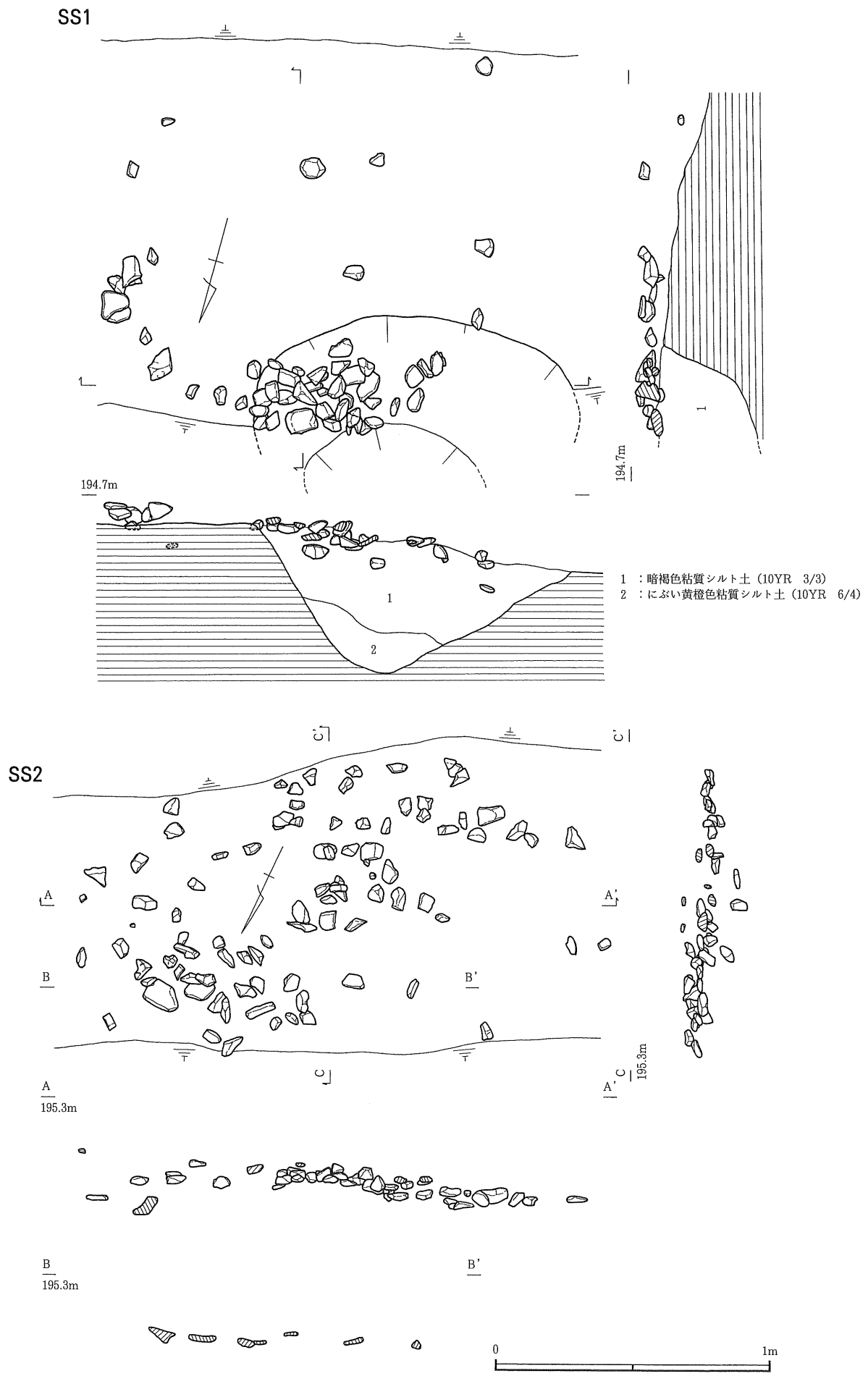
2 集石遺構

SS1 (第 6 図)

B-2・3 区で検出した 1.4 × 1.4 m の範囲に広がる集石遺構である。総数 62 個の礫から成る。構成礫は主として砂岩であり、ほとんどが角礫で、被熱して赤色化したり煤が付着したりしているものが多い。礫の総重量は 11.5kg で最大のものは 625g、最小の小礫で 2g を測る。ベース面は基本土層Ⅻ層最上部で、礫はⅨ層とその直下であるⅫ層の接点から出土している。遺構の半分以上は調査区外に延びるものと考えられる。また、最深部で深さ 0.5 m を測る円形を呈すると考えられる掘り込みを伴っている。礫の集中する範囲はこの掘り込みの中心よりもやや東側に偏っている。この集中部にある礫と周囲に散在する礫とが接合する例が存在することからも、本集石遺構は使用から廃棄される過程において礫が移動している可能性が高いものと考えられる。

SS2 (第 6 図)

B-3 区で検出した 1.95 × 1.1 m の範囲に広がる集石遺構である。総数 89 個の礫から成る。SS1 と同様に多くが角礫で、円礫は極めて少ない。やはり被熱しているものや煤の付着するものが多い。礫の総重量は 11.2kg を測り、重量では SS1 と大差はない。礫は最大のもので 430g、最小のもので 45g を測る。150g 前後のものが最も多い。集石を構成する礫は砂岩が主となる。SS1 同様Ⅻ層とその上位のⅨ層との接点から礫が検出されている。当初北側半分のみを検出していたが、これらの礫を取り



第6図 縄文時代早期集石遺構実測図 (1/20)

上げた後若干掘り下げ、再度精査したところ南側にも礫が集中する範囲があることが分かった。しかし、全体的にみても密度は小さく、広範にわたって散在しており、集石というより散礫に近い。掘り込みは伴っていない。出土礫のレベルをみると北から南にむけて若干傾斜しているのが分かる。集石の周辺からは縄文土器の破片が2点出土している。いずれも小破片のため図化し得なかった。器面が磨耗していたり、剥離していることから帰属時期は判断が困難であるが、少なくとも他の早期の土器とは胎土が異なる。

3 包含層出土の遺物

基本土層のXIおよびXII層が縄文時代早期の遺物包含層である。縄文時代早期の遺物に関しては、遺構に伴う資料は皆無で、全て後世の遺構内埋土と遺物包含層からの出土となる。出土遺物は土器・石器・礫で、その中でも礫が出土遺物の大部分を占める。また、礫に関してはIX層およびX層下部からみずかではあるが出土をみている。

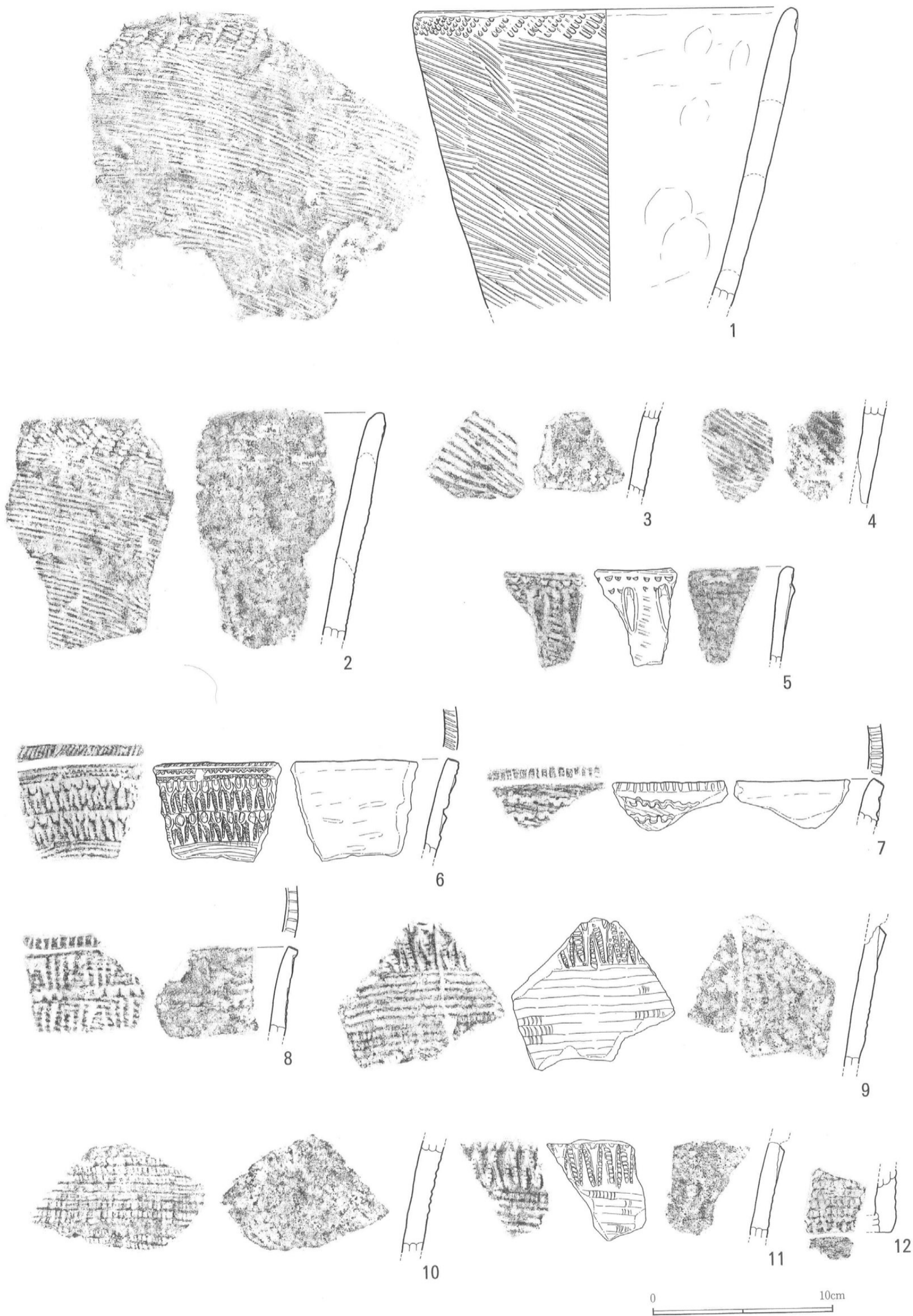
土器 (第7・8図)

縄文時代早期の土器のうち、図化可能なものは18点を数える。XI層下部からXII層上部にかけての出土が多い。XIII層上面のコンター図(第11・12図)を見ると分かるように、B-4杭付近にレベルの最高部があり、そこから東端・西端に向かって急激に傾斜してゆき、その差は最大で6.1mを測る。東端は若干傾斜がゆるやかになっており、ここで土器・黒曜石製の石器・礫が集中して出土した。出土土器の中には器面がかなり磨耗しているものがあることや、東端に向かい急激に傾斜する調査区の地形を考えると、隣地からの流れ込みである資料も存在するものと思われる。おそらく遺跡の本体は調査区の南側にあるのだろう。土器の出土地点は調査区東端のB-12・13区に集中している。調査区西側でも土器は出土しているが、出土量は限定的である。以下、既往の土器編年研究の成果を参照しつつ出土土器の分類を試みたい。

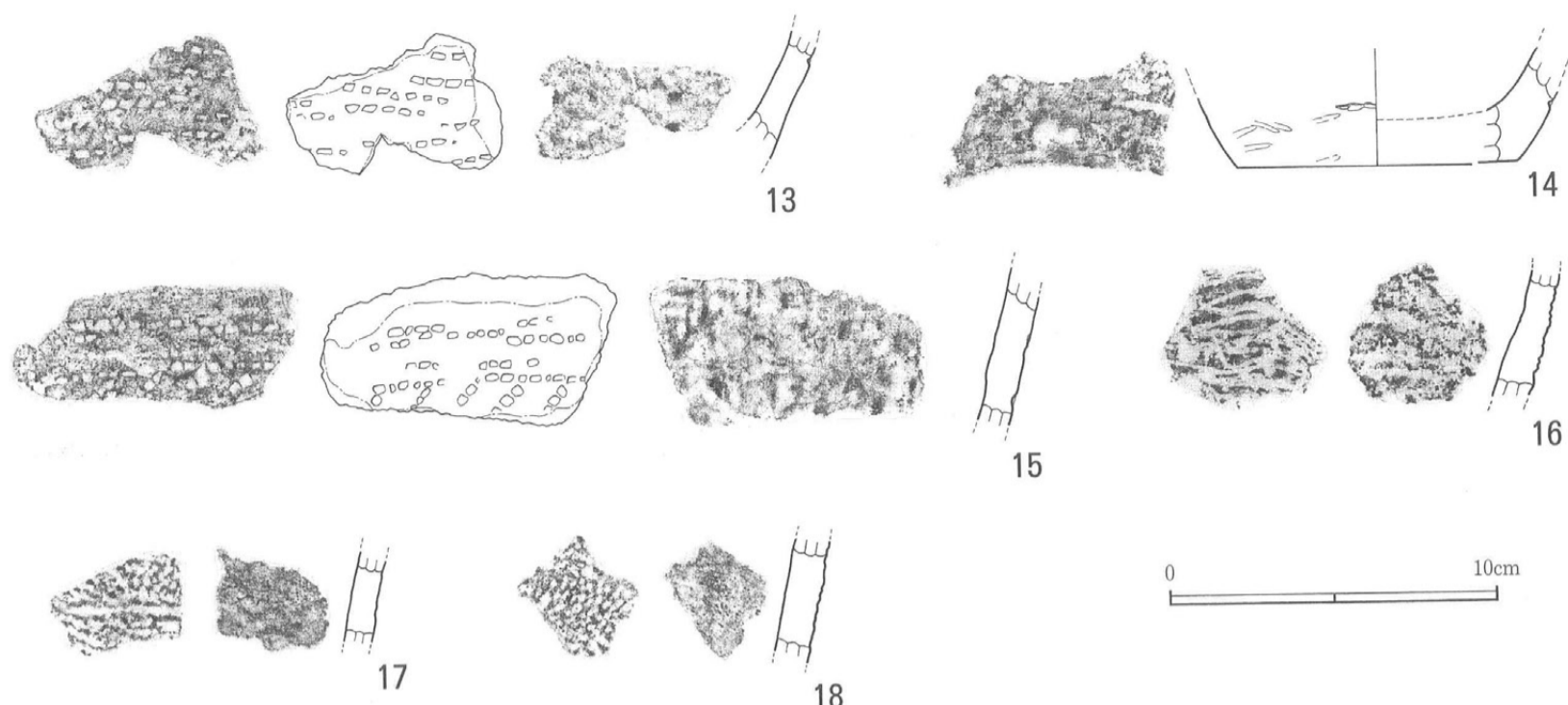
I類 (1～4)・・・口縁部直下に貝殻腹縁による押し引きに近い刺突文を施し、それ以下には斜位の貝殻条痕文が施される。器形は若干開きながら直線的に立ち上がるバケツ状を呈すものと考えられる。口縁端部は丸く収められる。現行の土器型式では、別府原式土器に相当するものである。**1**は復元すると口径が21cmを測る。器壁は最大で1.2cmを測り、かなり厚手の印象がある。**2**は出土位置がやや離れており、接合はしないが**1**と同一個体であると考えられる。**3・4**のように胴部片のみで全体の器形や文様構成が分からないものについても、斜位の条痕が施文されるものは本類に含めた。**3**は条痕が深くしっかりしており、前平式の可能性もある。

II類 (5)・・・口縁部は直口する。口縁部直下に横位の貝殻腹縁刺突文を施し、その下位に粘土紐を貼り付けることでやや丸味を帯びる楔形突起を作出するものである。突起の心々間は2.0cm程と狭い。突起間には地文として斜位の貝殻条痕が施される。梅北佐土原遺跡においては1点のみの出土である。楔形突起の間隔が狭く、突起間に刺突線文がみられないことに着目すれば、吉田式土器の古い段階に含まれる資料であると考えられる。全体的に磨耗している。

III類 (6～12)・・・胴部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる器形を呈す。底部は平底である。口縁部直下には横位に貝殻腹縁刺突線文を施し、それ以下には貝殻腹縁刺突文を縦位・斜位に数段施すものである。胴部には横位の押し引文を施す。外面の底部付近には縦方向に条痕文を施す。口縁部文様帯に施された貝殻刺突文がY字状を呈し、その凹凸から視覚的には楔形突起のようにみえる資料がある。これは前段階の楔形突起が形骸化したものと捉えられる。また、口縁端部には刻み目が施される。現行の土器型式では吉田式土器に相当する。**6・9・11**は口縁部に施文された貝殻刺突文が楔形突起状を呈すもので、それ以下には横位の押し引文が施される。**8**も同様に貝殻刺突文をY字状に施すが、磨耗していることもあり器面の凹凸は小さい。**7**は口縁部の小破片であるため文様構成などは判然としないが、おそらく**6**などと同様のものと考えられる。**10**は横位に押し引文が施された胴部片である。**12**はSC8の埋土の下層から出土したもので、底部片である。やはり横位の押し引文が施され、最下部には縦位に刻み目状の条痕が施されている。



第7図 縄文時代早期土器実測図① (1/3)



第8図 縄文時代早期土器実測図② (1/3)

IV類 (13～15)・・・器形はバケツ状の円筒形を呈すものと考えられる。外面には貝殻腹縁による刺突文を横位ないしは斜位に施す。現行の土器型式では下剥峯式土器に相当する。**13**はA-6区で出土した円筒形土器の底部付近の破片である。外面には貝殻腹縁刺突文が横位に数段施される。内面はナデ調整が加えられている。胎土には石英と角閃石が含まれており、硬く焼き締まる。**14**は径8.6 cmを測る底部片で、**13**と同一個体であると考えられる。**15**もA-6区で出土した土器である。バケツ形を呈する円筒形土器の胴部片であると考えられる。外面には貝殻腹縁による刺突文が横方向に数段施され、それ以下には右上がりの斜位に同じく貝殻腹縁刺突文が施される。内面は磨耗しているため調整は不明瞭であるが、ミガキが施されているものと考えられる。胎土には大きめの白色砂粒と金雲母が混入しており、非常に脆い。

V類 (17・18)・・・器形は不明である。外面には縄文が施される。本類としては**17**と**18**が出土しているが、いずれも小破片のため器形や全体的な文様構成などは分からない。**17**は縦方向にLRの単節縄文が施され、**18**は横方向にRLの単節縄文が施文されている。

VI類 (16)・・・器形は不明である。外面には横方向に変形撚糸文が施される。**16**は中世の遺構であるSC8の埋土内から晩期の土器や土師器とともに出土している。胴部片であると考えられる小破片である。本類は1点のみの出土である。

石器 (第9・10図)

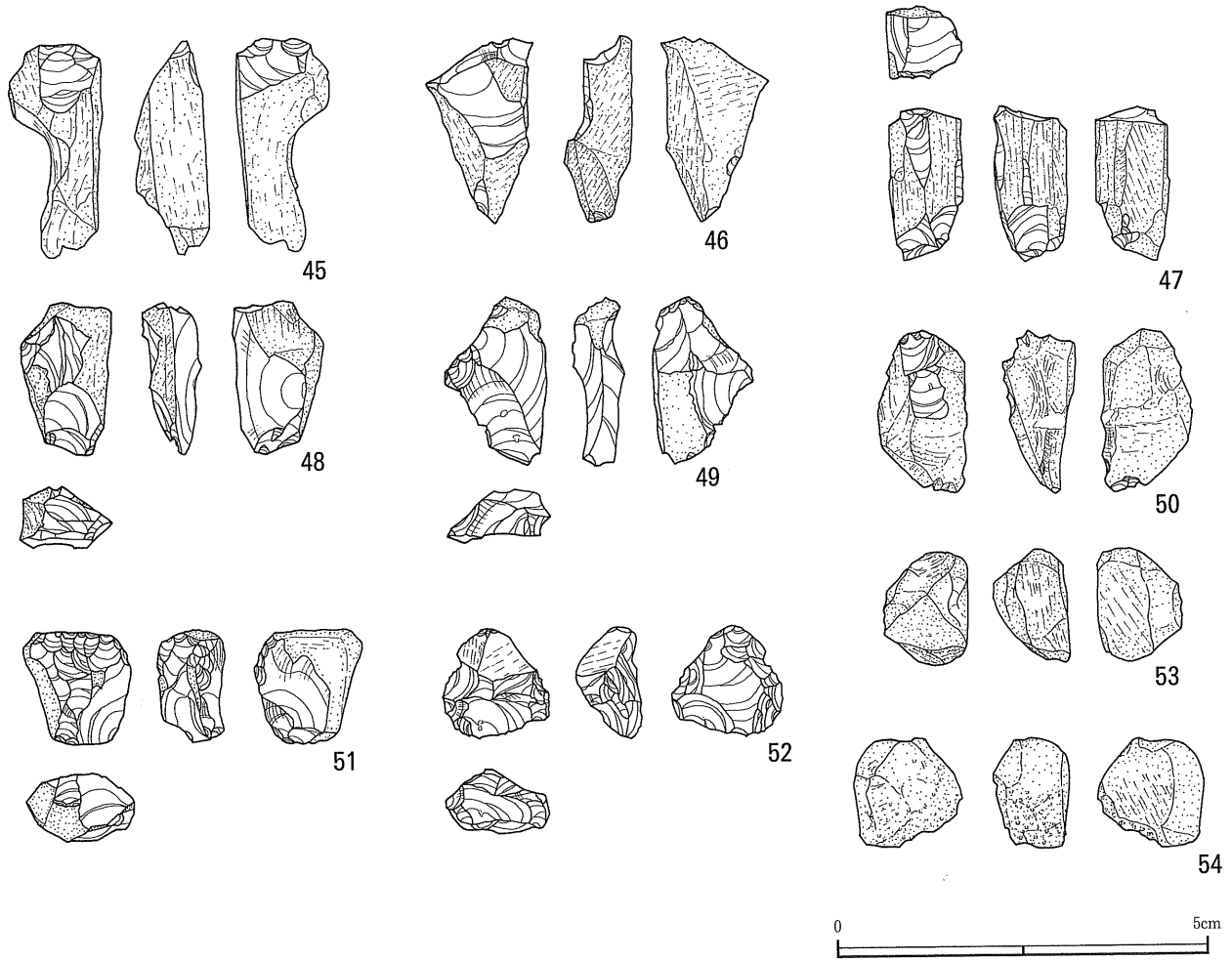
石器も土器と同様に主としてXIおよびXII層から出土しているが、何点かはX層から出土している。器種をみると、石鏃・微細剥離のある剥片・石核・原石・剥片が出土しており、総数は36点を数える。この中でも剥片が16点で、全体の44%を占める。使用されている石材はほとんどが黒曜石である。黒曜石には数種類が認められる。ここでは肉眼観察により、分別可能な以下の三類に分類した。透明度が高く節理が黒い縞状に見えるものを黒曜石Aとし、黒色を呈し比較的夾雑物が多いものを黒曜石B、灰白色を呈し表面に鈍い光沢をもつものを黒曜石Cとする。出土資料のほとんどが黒曜石Aであり、黒曜石B・黒曜石Cはそれぞれ1点のみの出土である。以下器種ごとに観察結果を述べるが、個別資料の詳細は計測表(第2表)に記載している。

石鏃は合計4点出土しており、いずれも黒曜石製である。**19・20**は小型の三角形を呈しており、法量もほぼ同一の資料である。**20**は左脚部が折損する。**21**もほぼ正三角形を呈するものであるが、左側縁は欠損する。最大厚が0.7 cmと他の資料に比べ厚くなる。**22**は背面に大きく原礫面をつけるが、基部および両側縁には細かな剥離が加えられており、形態からは石鏃として使用されたものと考えられる。

微細剥離のある剥片は合計7点出土している。いずれも黒曜石製である。**23**は表面側縁上半に微



第9図 縄文時代早期石器実測図① (1/1)



第10図 縄文時代早期石器実測図② (1/1)

細剥離が観察される。**24**は側縁両側に微細剥離がみられ、背面には大きく原礫面を残す。**25**は下端に微細剥離が観察される資料で表面上端には原礫面を残す。**26**と**27**は片方側縁に微細剥離がみられ、背面には原礫面を残す資料である。**28**は表面上端から右側縁上半にかけて微細剥離を有する資料である。微細剥離が観察される側縁が錐状を呈している。**29**は表面下端に微細剥離をつける剥片である。

剥片は合計15点出土している。**31**や**35**などは片面に大きく原礫面を残す。**36**や**39**のように、原礫面をつけずに比較的小型のものも認められるが、原礫面をつけるものが圧倒的に多いことが特徴的である。これは原石自体が小型のため、そこから剥ぎ取られる剥片にも原礫面が残るケースが多いものと考えられる。

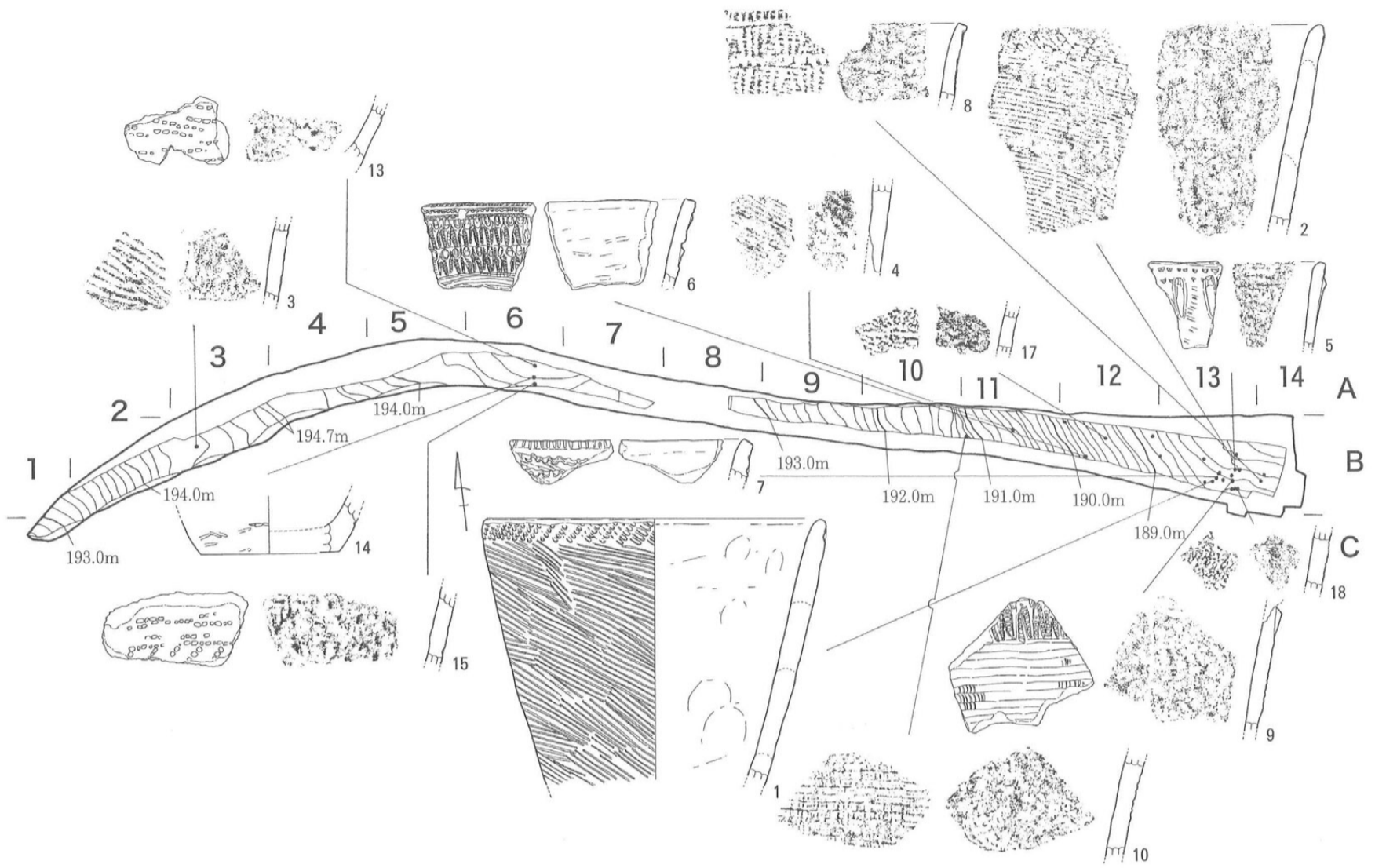
石核は8点出土している。**45・46・50**のように剥離面が少なく原石に近いものや、**51・52**のように細かい剥離面が重なる資料がみられる。

原石は2点出土している。いずれも黒曜石製である。最大長が1.5cm程で小型であるのが特徴といえる。

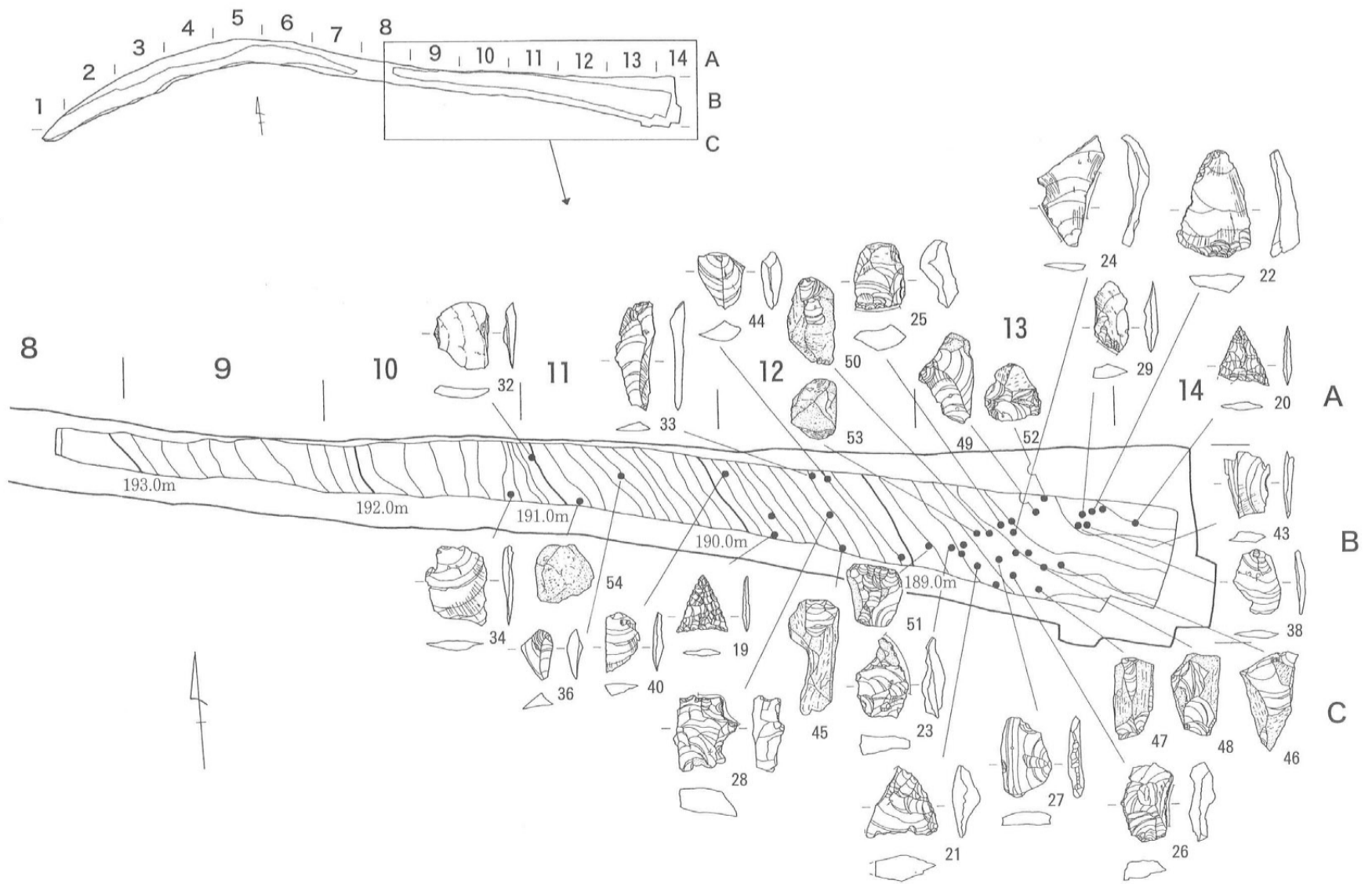
本遺跡から出土した石器類の特徴として、ほとんどが黒曜石製（他にチャートが1点のみ出土）であり、その黒曜石も原石自体が非常に小型であることが挙げられる。その結果、器種にかかわらず原礫面を残す資料が多数みられる。また、黒曜石に関しても複数の原産地が想定され、上述のように少なくとも三種類の黒曜石が確認できた。

礫

上述のように、本遺跡において最も多く出土したのは礫である。包含層内から出土した礫は総数で512点を数える。出土層別に見てみるとⅫ層が最も多く、約6割を占める。地区別にみるとB-12・13区出土が全体の約半数を占める。これらの包含層出土礫の中にも被熱し赤化するものや煤の付着するものが存在している。また、形状や大きさをみても集石に使用されている礫と同様のものが多いことから、使用後破壊されたり、流れ出した集石遺構の残礫が含まれていたものと考えられる。



第11図 縄文時代早期土器分布図 (1/400)

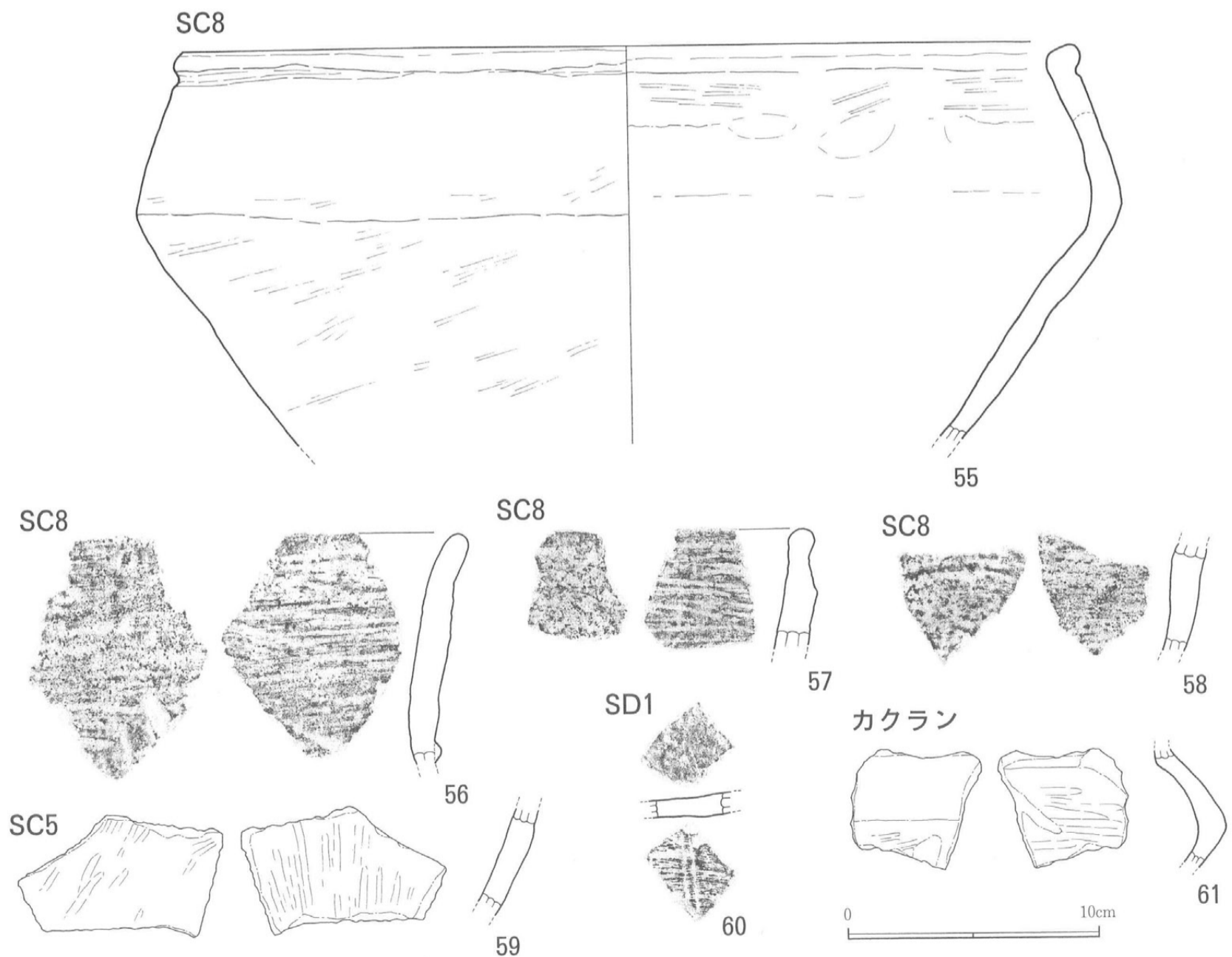


第12図 縄文時代早期石器分布図 (1/200)

4 その他の土器

先述のように、縄文時代晩期の遺物は中世の遺構の埋土内ないしは樹痕などの攪乱内から出土しているのみである。多くが中世の所産であると考えられる遺構内から陶磁器や土師器とともに混在して出土する傾向にあり、確実に当該時期のものと考えられる遺物包含層や遺構は確認できなかった。比較的大きな破片も認められるが、出土土器のほとんどが小破片である。以下、当該時期の出土土器について観察所見を述べる。

55 は調査区の法面を精査している際に検出した深鉢形土器で、SC8 の埋土上部からの出土である。口縁部から胴部上半にかけて遺存している。口径は復元すると 35.6 cm を測る。胴部が「く」の字に強く屈曲し、口縁部に向かい内傾する器形を呈す。口縁端部を外側に折り返すことで肥厚させ、その直下を撫で付けて凹線状の窪みを作る。内外面ともにナデ調整が加えられるが、外面は工具を使用していると考えられ、削痕が顕著に残る。**56** ~ **58** も SC8 の埋土から出土したものである。**56** は深鉢口縁部片である。外面は条痕調整後ナデ調整が加えられる。内面については磨耗しているため調整は不明確だが、表面と同様に条痕を施した後にナデないしはオサエにより調整されているものと思われる。また、頸部にはわずかに突帯の痕跡が認められる。**57** も深鉢口縁部片である。口縁部直下が、指で摘み上げることで断面三角形の突帯状を呈している。内面は条痕風の調整痕がみられるが、ナデが加えられることで比較的平滑に仕上げられている。外面の一部には煤が付着する。SC8 からはこの他にも小破片のため図化し得なかった資料が数点出土している。それらの多くは **56** や **57** と同様の粗製深鉢片であると考えられる。**59** は SC5 から土師器とともに出土した資料である。内外面ともにミガキが加えられる。内面は黒色化する。胎土や色調など、他の晩期の資料とは顔つきが異なる。**60** は SD1 内から出土した組織痕を残す資料である。内外面ともに磨耗している。**61** は攪乱内（樹痕）から出土した浅鉢形土器である。内外面ともに磨耗しているが、ミガキ調整が加えられているようである。黒川式期の浅鉢であろう。



第13図 縄文時代晩期土器実測図 (1/3)

第4節 中世の遺構と遺物

梅北佐土原遺跡においては、基本土層のIV層が中世の遺物包含層に相当する。IV層は調査区東側のみ厚く堆積しており、それに伴いほとんどの遺構が調査区東側で検出されている。包含層からの遺物の出土量は極めて少量である。調査区西側では基本的に表土直下は基本土層のVI層よりも下位の層が堆積しており、中世の遺物包含層は遺存していなかった。そのため、西側では掘り込みの深い遺構だけが辛うじて検出されたのみであった。遺構の本来の掘り込み面はさらに上部であったと考えられる。遺物が出土しているものが少なく、帰属時期を判断する際の根拠は埋土に依るものが多い。調査区東側においては、中世の遺構は御池軽石上面、西側については表土直下が検出面となった。以下、中世に帰属すると考えられる遺構およびそこから出土した遺物について報告することにした。

1 溝状遺構

SD1 (第15図)

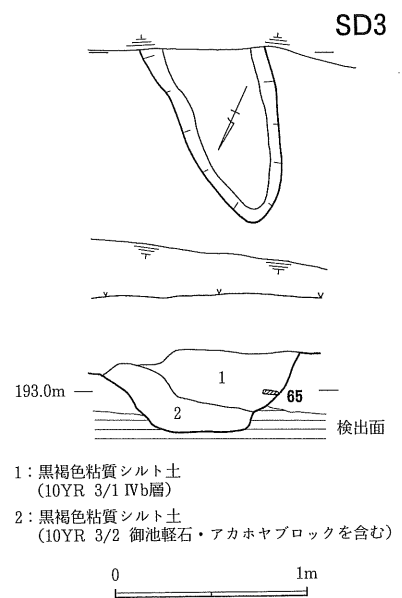
A-4・5区で検出した溝状遺構である。幅1.9mであるが、長さについては調査区幅分の0.6mを検出したにとどまった。遺構の深さは最深部で1.2mを測り、西側には段がつく。埋土中位からは人頭・拳大の礫がまとまって出土している。その大きさは最大のもので2,010g、最小のもので55gを測る。破碎しているため小型のものも認められるが、全般的に縄文時代早期の集石と比べると一回り大きくなる。礫の中には被熱痕や煤の付着が認められるものが数点確認できることから、竈や炉などに使用された石が人為的に廃棄された可能性が考えられる。この礫集中部の周囲からは縄文晩期の組織痕土器(60)や備前焼と考えられる陶器の破片(67)が検出されている。他の中世に帰属すると考えられる遺構と同様に、埋土からは縄文時代と中世の遺物が混在して出土していることから、土砂崩れなどで標高の高い方から土が流入する状況にあったものと思われる。また、埋土の上層に堆積した文明軽石とその上位の表土層(I層)が、挿鉢状に堆積した遺構の底面に流れ込むように堆積している。このことから、文明軽石が降下した頃には本遺構は完全には埋没しておらず、挿鉢状の窪みとなっていたものと考えられる。遺構が土砂の流入などで、比較的短期間に埋没したと仮定すれば、遺構の帰属時期も文明軽石が降下し、堆積した時期とさほど大きな開きはないものと推測できる。

SD2 (第15図)

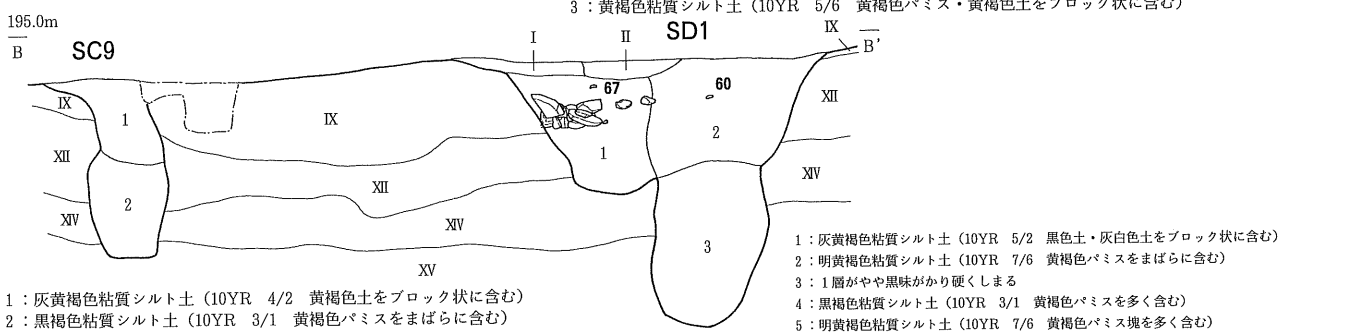
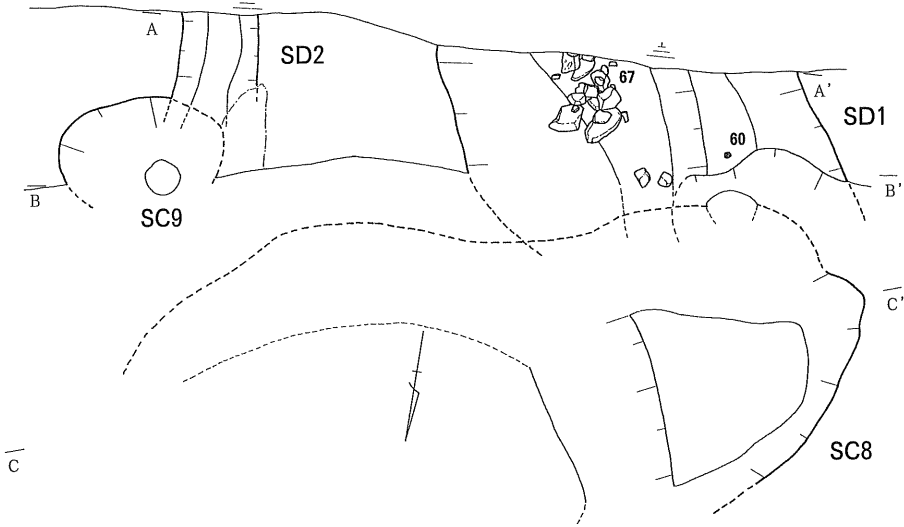
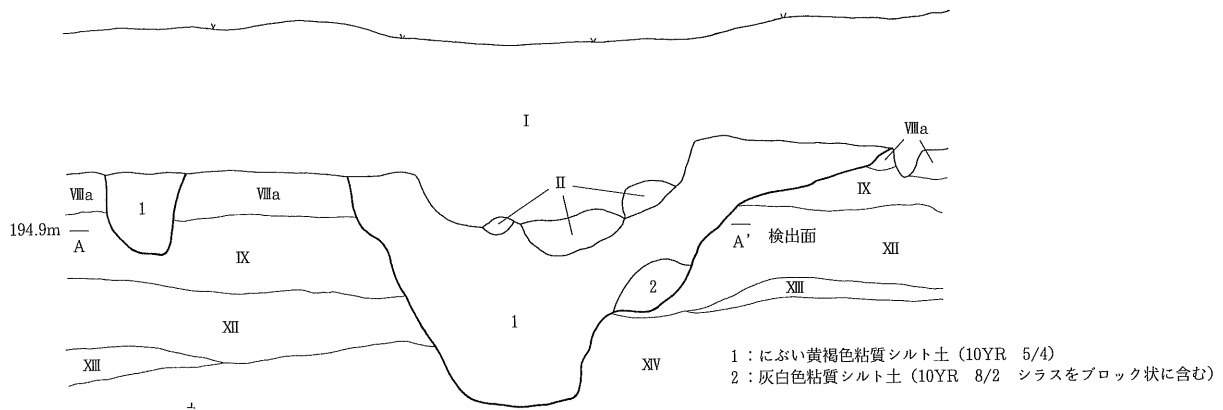
A-5区で検出した南北方向に延びると考えられる溝状遺構である。検出できたのは調査区幅分の0.4×0.6mである。SC9と重複関係にあるが、埋土が類似していたことから、当初同一遺構と考えて掘り下げていたため、前後関係は判然としない。検出面からの深さは最深部でも0.1mと極めて浅い。遺構の南側は調査区壁にかかっており、それを観察すると、本来はさらに上位から掘り込まれていることが分かる。その深さは0.4m程である。遺物は出土していないが、埋土がIV b層であることから中世の所産である可能性が高いものと考えられる。

SD3 (第14図)

B-3区で検出した溝状遺構である。検出した範囲は0.95×0.6mの土坑状であったが、本来は調査区を横断するように、北西—南東方向に延びてゆくものと考えられる。基本土層のVII層中が検出面となり、遺構の深さは最深部でも0.1mを測るのみである。遺構は調査区壁にかかっており、この断面を観察すると少なくとも深さは0.4m程のようである。埋土は二層に分かれ、埋土上部にはIV b層が堆積している。ここから土師器片(65)が出土しているが破片のため器種・帰属時期などは判然としない。しかし、他の遺構と同様に埋土にはIV b層が堆積していることから、遺構の帰属時期は中世である可能性が高いと考えられる。



第14図 中世遺構実測図①
(溝状遺構、1/40)



第15図 中世遺構実測図②(溝状遺構・土坑、1/40)

2 土坑

中世に帰属すると考えられる土坑は合計9基検出されている。その多くは調査区東側で検出されたものである。溝状遺構と同様に遺物が出土しているものは少ないが、埋土の観察からは中世の所産であると考えられる。

SC1 (第16図)

B-14区で検出された土坑である。径約0.4mを測るものと考えられるが、半分以上が調査区外に延びるため全体は判然としない。検出面からの掘り込みの深さは0.15mを測る。埋土はIVb層の単層で、ここから土師器皿の小破片が出土しているが、図化はし得なかった。

SC2 (第16図)

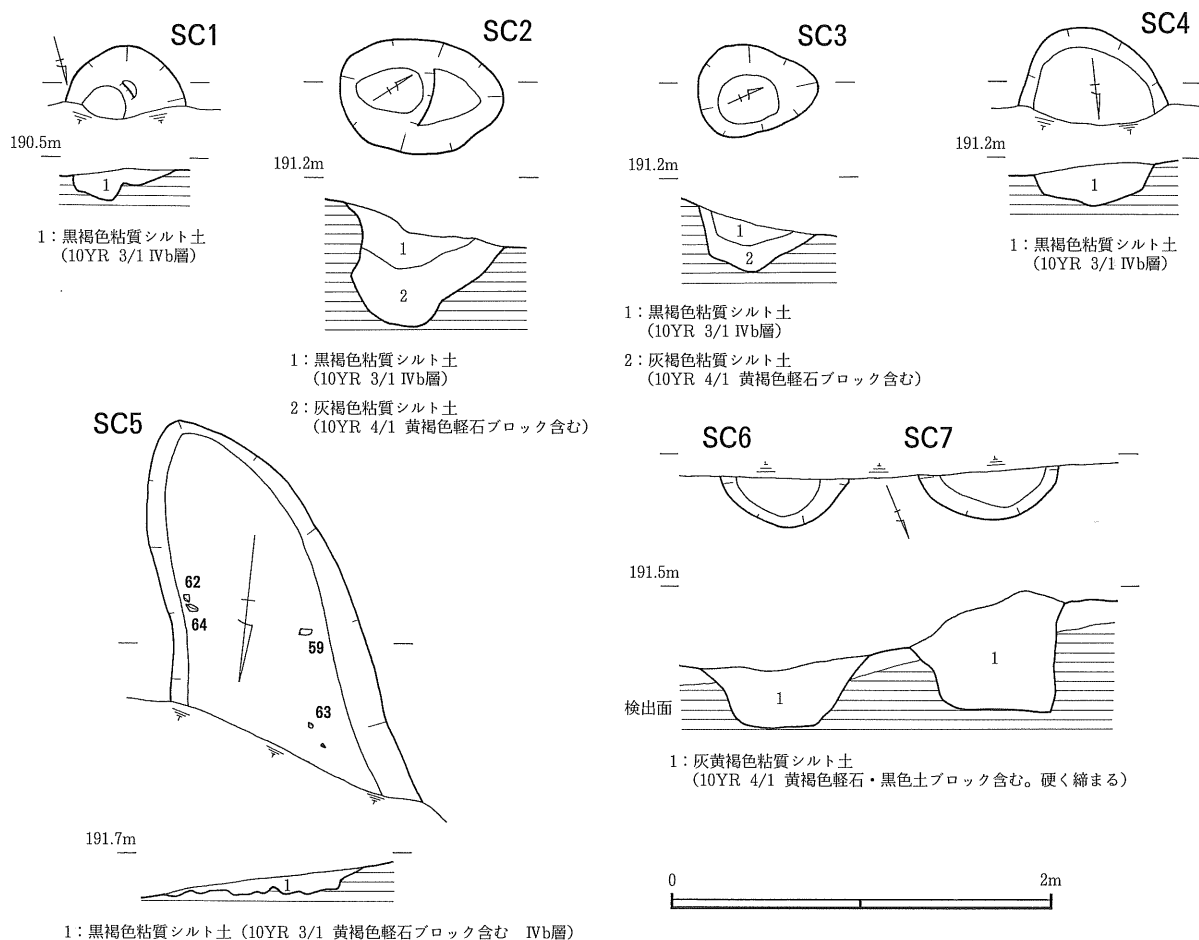
B-13区で検出された土坑で、0.85×0.6mの楕円形を呈する。掘り込みは最深部で0.5mとしっかりしている。埋土は二層に分層が可能で、上層にIVb層が堆積している。埋土上層からは図化し得なかったが、土師器の小破片と礫が出土している。

SC3 (第16図)

B-13区、SC2に隣接して検出された。0.65×0.45mの楕円形を呈する。検出面からの掘り込みの深さは最深部で0.3mを測る。埋土はSC2同様に二層に分層が可能であり、やはり上層はIVb層が堆積している。埋土の堆積状況が同一であることから、SC2とは同一時期ないしは近接する時期の所産であると考えられる。

SC4 (第16図)

B-12区で検出され半分以上が調査区外に延びるが、径0.8mの円形を呈するものと考えられる。検出面からの掘り込みは0.2mを測る。埋土はIVb層の単層である。この埋土中から碎片のため図化不可能であったが、土師器片が出土している。



第16図 中世遺構実測図③(土坑、1/40)

SC5 (第16図)

B-11区で検出されており、1.1×1.8mの不整形を呈する。遺構の深さは0.1mと浅いことから、既に大部分が削平されているものと思われる。調査区壁の断面では掘り込みは確認できなかったが、その形状から本来は溝状遺構であった可能性もある。埋土からは62～64が出土している。62は復元すると口径9.2cmを測る土師器小皿である。底部の切り離しは糸切りである。63は土師器杯であると考えられる。小破片のため口径は復元し得なかった。内外面ともにナデ調整が顕著に残る。64は底部に糸切り痕が残る土師器皿である。口縁部は遺存していないが、底径は復元すると10cmを測る。全体的に磨耗が著しく、調整は明確でない。この他、縄文時代晩期の深鉢片であると思われる59も出土している。

SC6 (第16図)

B-13区で検出されている。半分以上が調査区外に延びるが、径0.7mの円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは0.2mを測るのみだが、本来は少なくとも0.3m程の深さがあったようである。埋土は御池軽石をブロック状に含み硬くしめる層である。この遺構内埋土よりも上位に基本土層IVb層が堆積しており、IVc層中に掘り込まれている。断面形態は逆台形を呈す。遺物が出土していないため帰属時期の特定は難しいが、土層の堆積状況からは少なくともIVb層を埋土とする土坑よりは時期的に古いものであるといえる。

SC7 (第16図)

B-13区、SC6の西隣で検出されている。やはり半分以上が調査区外に延びる。本来は径0.7mの円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは0.4mを測るが、調査区壁の断面をみると本来は0.6mの深さがあったようである。断面形態は逆台形を呈しており、埋土はSC6と同様の堆積状況をみせる。

SC8 (第15図)

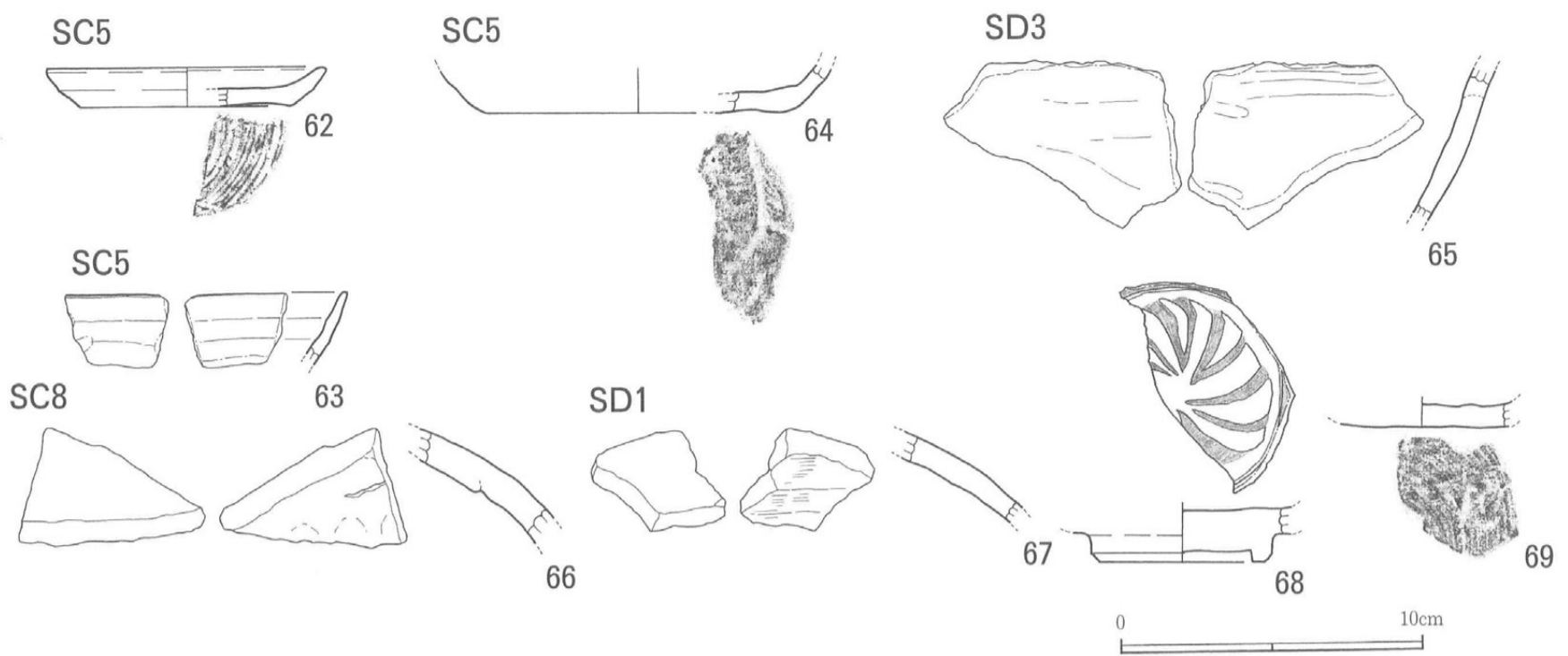
A-4・5区で検出された大型の土坑で、SD1に切られていた可能性が高いが、検出面が調査区北側の法面部分であったため、切り合いによる遺構の前後関係は判然としない。調査区の北壁(法面部分)を精査している際に検出されており、本来の掘り込み面は判然としないが、掘り込み自体は深く、底面はシラス層(XV層)に達する。この法面の精査中に比較的大きな縄文晩期の深鉢(55)が出土している。これよりも下位の埋土中からは中世の陶器(66)・縄文晩期の浅鉢片・縄文早期吉田式土器の底部片(12)が出土している。この他、縄文晩期の深鉢である56～58や、これと同時期と考えられる深鉢の小破片が数点出土している。断面で埋土の堆積状況を観察すると、縄文早期の遺物が出土している層よりも下層から中世と縄文晩期の遺物が出土していることが分かる。よって、中世以降に土坑が掘削された後に土砂崩れなどにより古い時代の遺物包含層が遺構内に流入したのと考えられる。しかも埋土の大部分がブロック状に堆積していることから、時間をかけてゆっくり堆積したのではなく、比較的短期間のうちに土が流れ込み、埋没したのと考えられる。よって、出土遺物からは遺構の帰属時期を明言することはできない。なお、埋土の1～4層は重複する別遺構のものである可能性も考えられる。遺構の東側は造成に伴い大きく攪乱を受けており、シラス・黒褐色土・黄褐色土などが交互に堆積する。

SC9 (第15図)

A-5区で検出されており、SD2と重複する。径0.9m程の円形を呈するものと考えられる。しかし、その半分以上が調査区外にかかる上に西半分は樹痕により攪乱を受けるため、判然としない。遺構自体は非常に深く、検出面からの深さは最深部で1mを測り、底面は基本土層のXV層まで達する。遺物は出土していない。

3 包含層出土の遺物

上述のように、本遺跡では基本土層のIV層が中世の遺物包含層であった。しかし、包含層からの遺物の出土量は限定的で、図化できたのはわずかに2点のみである。68はIVa層から出土した青磁碗である。底部のみの資料で、内面見込みには花文が確認できる。69は土師器皿と考えられる資料で、IVb層から出土している。底部のみの資料で、底径は5.5cmを測る。底部の切り離しは糸切りである。



第17図 中世遺物実測図(1/3)

第1表 縄文時代早期土器観察表

遺物番号	出土地点	出土層位	分類	文様・器面調整		色調		胎土	備考
				外面	内面	外面	内面		
1	B-13	XII	I	貝殻押引・貝殻条痕	オサエ→ナデ	明褐	浅黄	石英	口径 21.0 cm
2	B-13	XII	I	貝殻押引・貝殻条痕	オサエ→ナデ	明褐	橙	石英	1 と同一個体か
3	B-3	X	I	貝殻条痕	磨耗	明黄褐	灰黄褐	角閃石	
4	B-11	XII	I	貝殻条痕	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英	
5	B-13	XII	II	条痕 → 貝殻刺突・楔形突起	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	石英	全体的に磨耗する
6	B-12	XII	III	貝殻刺突・貝殻押引	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	金雲母・長石	
7	B-13	XII	III	貝殻刺突	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英	
8	B-14	XI	III	貝殻刺突	ナデ	褐	橙	石英	
9	B-13	XII	III	貝殻刺突・貝殻押引	磨耗	明赤褐	橙	石英・長石	全体的に磨耗する
10	B-12	XI	III	貝殻押引	磨耗	橙	にぶい黄橙	長石・黒色砂粒	
11	試掘	XII	III	貝殻刺突・貝殻押引	磨耗	赤褐	赤褐	石英	試掘 4Tr から出土
12	SC8	16	III	貝殻押引	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英	SC8 埋土中から出土
13	A-6	XII	IV	貝殻刺突	ナデ	明褐	にぶい褐	長石・角閃石	14 と同一個体か
14	A-6	XII	IV	貝殻刺突・ミガキ	ナデ	明褐	にぶい褐	長石・角閃石	底径 8.6 cm
15	A-6	XII	IV	貝殻刺突	ミガキ	橙	灰褐	金雲母・白色砂粒	
16	SC8	中	VI	変形撚糸文	オサエ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英	全体的に磨耗する
17	B-12	XII	V	縄文(タテLR)	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・角閃石	
18	B-13	XII	V	縄文(ヨコRL)	ナデ	灰黄褐	黄橙	長石・石英	

第2表 縄文時代早期石器計測表

遺物 番号	出土 地点	出土 層位	器 種	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)
19	B-12	XII	石鏃	黒曜石 A	1.4	1.25	0.2	0.2
20	B-14	XI	石鏃	黒曜石 A	1.5	1.25	0.2	0.2
21	B-13	XII	石鏃	黒曜石 A	1.8	1.9	0.7	1.2
22	B-13	X	石鏃	黒曜石 A	2.6	1.9	0.75	2.1
23	B-13	XII	微細剥離のある剥片	黒曜石 A	2.05	1.35	0.6	0.9
24	B-13	XII	微細剥離のある剥片	黒曜石 A	2.25	1.7	0.5	1.2
25	B-13	X	微細剥離のある剥片	黒曜石 A	1.7	1.3	0.8	1.7
26	B-13	XII	微細剥離のある剥片	黒曜石 B	2	1.3	0.7	1.2
27	B-13	XI	微細剥離のある剥片	黒曜石 A	2.05	1.3	0.35	0.9
28	B-12	XI	微細剥離のある剥片	黒曜石 A	1.9	1.6	0.8	1.7
29	B-13	X	微細剥離のある剥片	黒曜石 A	1.8	0.9	0.35	0.4
30	B-13	X	剥片	黒曜石 A	1.7	1.25	0.4	0.6
31	B-13	X	剥片	黒曜石 A	2.1	1.9	0.5	1
32	B-11	XII	剥片	チャート	1.7	1.4	0.3	0.6
33	B-12	XII	剥片	黒曜石 A	2.7	1	0.35	0.5
34	B-10	XII	剥片	黒曜石 A	2	1.55	0.3	0.7
35	B-12	XII	剥片	黒曜石 A	1.3	1.2	0.6	0.7
36	B-11	XII	剥片	黒曜石 A	1.3	0.8	0.4	0.2
37	B-13	XI	剥片	黒曜石 A	1.6	1.2	0.2	0.2
38	B-13	XII	剥片	黒曜石 A	1.6	1.2	0.25	0.3
39	B-13	XI	剥片	黒曜石 A	1	0.95	0.25	0.2
40	B-12	XII	剥片	黒曜石 A	1.5	1.35	0.3	0.3
41	B-13	XII	剥片	黒曜石 C	1.75	1	0.35	0.4
42	B-13	XII	剥片	黒曜石 A	1.8	0.9	0.5	0.5
43	B-13	X	剥片	黒曜石 A	1.7	1.2	0.25	0.4
44	B-12	XI	剥片	黒曜石 A	1.6	1.2	0.55	0.6
45	B-12	XII	石核	黒曜石 A	2.9	1.3	1	2.7
46	B-13	XII	石核	黒曜石 A	2.5	1.5	0.9	2.3
47	B-13	X	石核	黒曜石 A	1.5	1.4	0.9	1.2
48	B-13	XI	石核	黒曜石 A	2.1	1.3	0.75	1.5
49	B-13	XI	石核	黒曜石 A	2.25	1.4	0.7	1.4
50	B-13	XII	石核	黒曜石 A	2.2	1.2	1	2.4
51	B-13	XI	石核	黒曜石 A	1.5	1.45	0.9	1.9
52	B-13	X	石核	黒曜石 A	1.5	1.4	0.9	1.2
53	B-13	XII	原石	黒曜石 A	1.55	1.15	1	2
54	B-11	XII	原石	黒曜石 A	1.5	1.5	1.05	2.2

第3表 縄文時代晩期土器観察表

遺物 番号	出土 地点	出土層位	文様・器面調整		色調		胎土	備考
			外面	内面	外面	内面		
55	SC8	上層	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色・黒色砂粒	口径 35.6 cm
56	SC8	中層	条痕→ナデ	条痕→ナデ・オサエ	暗褐	浅黄橙	長石・石英	
57	SC8	上層	ナデ	条痕→ナデ	褐灰	にぶい黄橙	長石・白色砂粒	
58	SC8	中層	ナデ	条痕→ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	長石	
59	SC5	1層	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	白色砂粒	
60	SD1	1層	組織痕	ナデ	浅黄橙	褐灰	長石	
61	B-1	攪乱	磨耗	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	黒色砂粒	全体的に磨耗する

第4表 中世遺物観察表

遺物 番号	出土 地点	出土層位	文様・器面調整		色調		胎土	備考
			外面	内面	外面	内面		
62	SC5	1(IVb)層	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色砂粒	口径 9.2 cm、 器高 1.3 cm、 底径 7.0 cm
63	SC5	1(IVb)層	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色砂粒	
64	SC5	1(IVb)層	磨耗	磨耗	灰黄	灰黄	白色砂粒	底径 10 cm
65	SD3	1(IVb)層	丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	長石	
66	SC8	22層	施釉	ユビオサエ	オリーブ黄	にぶい褐	白色砂粒	
67	SD1	4層	施釉	ヨコナデ	褐灰	灰黄褐	白色砂粒	
68	B-13	IVa	施釉	施釉	オリーブ灰	オリーブ灰	微細黒色粒	内面見込みに花文あり
69	B-13	IVb	糸切り痕	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	茶褐色砂粒	底径 5.5 cm

第4章 自然科学分析

第1節 梅北佐土原遺跡におけるテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

南九州地方に位置する都城市域には、始良、鬼界、阿多、池田などのカルデラ火山のほか、霧島や桜島など成層火山の噴火に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く分布している（たとえば早田，2006）。これらのテフラの中には、すでに層位や噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それとの層位関係を遺跡で求めることによって、遺構や遺物包含層の層位や年代に関する資料を収集できるようになっている。

そこでテフラが認められた梅北佐土原遺跡の発掘調査区においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行い、指標テフラの検出同定を実施して、土層や遺物包含層の層位や年代に関する資料を求めることになった。調査分析の対象となった地点は、A-7区およびB-13区の2地点である。

2. 土層の層序

(1) A-7区

A-7区では、下位より風化した桃白色火砕流堆積物（層厚 55 cm 以上）、黄橙色軽石を含み層理が認められる黄色の凝灰質砂層（層厚 62 cm，軽石の最大径 41 mm，石質岩片の最大径 14 mm，XIV層）、黄色軽石（最大径 4 mm）混じりで褐色土ブロックを含む灰褐色土（層厚 13 cm，XIII層）が認められる（第18図）。

(2) B-13区

B-13区では、下位よりわずかに灰色がかった褐色土（層厚 16 cm）、灰褐色土（層厚 6 cm，以上XIII層）、灰褐色土（層厚 7 cm）、黒灰褐色土（層厚 19 cm）、橙色軽石混じり黒灰褐色土（層厚 17 cm，軽石の最大径 12 mm）、暗灰褐色土（層厚 9 cm，以上XII層）、灰褐色土（層厚 10 cm）、若干灰色がかった褐色土（層厚 17 cm，以上XI層）、黄色軽石層をブロック状に含む暗灰褐色土（層厚 12 cm，軽石の最大径 6 mm，X層）、黄色軽石混じりで黄灰色土をブロック状に含む褐色土（層厚 21 cm，軽石の最大径 4 mm）、灰色土（層厚 11 cm，以上IX層）、成層したテフラ層（層厚 23 cm）、褐色砂質土（層厚 7 cm，以上VIII層）、黄色軽石混じり褐色土（層厚 26 cm，軽石の最大径 3 mm，VII層）、褐色土（層厚 11 cm，VI層）、正の級化構造が認められる黄色軽石層（層厚 26 cm，軽石の最大径 8 mm，石質岩片の最大径 2 mm，V層）、暗灰褐色土（層厚 8 cm，IV c層）、灰白色軽石を多く含む暗灰褐色土（層厚 12 cm 以上，軽石の最大径 11 mm，I層）が認められる（第18図）。発掘調査では、XII層中部からXI層下部にかけて縄文時代早期の土器が検出されている。

VIII層は、下位より褐色火山豆石を含む黄橙色軽石層（層厚 3 cm，軽石の最大径 22 mm，石質岩片の最大径 2 mm，火山豆石の最大径 5 mm）、黄橙色細粒軽石混じり黄色粗粒火山灰層（層厚 4 cm，以上VIII b層）、橙色砂質細粒火山灰層（層厚 16 cm）、褐色砂質土（層厚 7 cm，以上VIII a層）からなる。これらのうち、成層したテフラ層は、その層相から約 6,300 年前^{*1}に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰層（K-Ah，町田・新井，1978）に同定される。またV層の軽石層は、層位や層相などから、約 4,200 年前^{*1}に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池テフラ（Kr-M，町田・新井，1992，奥野，1996）に同定される。さらに、I層中に含まれる灰白色軽石については、層位や岩相などから1470年代に桜島火山から噴出したと考えられている桜島3（Sz-3，小林，1986，重永，1991，町田・新井，1992，早田，2006 など）に由来すると考えられる。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

A-7 区の XIV 層のマトリクスから採取された試料（試料 2）および XIII 層に含まれる褐色土ブロック（試料 1）、B-13 区の X 層中の軽石層（試料 2）と IX 層上部の灰色土（試料 1）の 4 試料について、テフラ検出分析を行い、含まれるテフラ粒子の定性的な特徴の把握を行った。

テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料 8 g を秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第 5 表に示す。A-7 区の試料 2 には、黄白色の軽石（最大径 5 mm）が多く含まれている。火山ガラスとしては、黄白色や白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。試料 1 には、白色の軽石（最大径 7.1 mm）が比較的多く含まれている。また火山ガラスとしては、スポンジ状に発泡した白色の軽石型ガラスのほか、淡褐色のバブル型ガラスが比較的多く含まれている。

B-13 区の試料 2 には、繊維束状に発泡した細粒の白色軽石（最大径 2.2 mm）が少量含まれている。火山ガラスとしては、透明のバブル型や繊維状に発泡した軽石型ガラスが多く含まれている。色調は無色透明や褐色である。試料 1 には、透明のバブル型や繊維状に発泡した軽石型ガラスが多く含まれている。色調は無色透明や褐色である。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と方法

テフラ検出分析の対象となった 4 試料を対象に、含まれるテフラ粒子について、温度変化型屈折率測定法により屈折率の測定を行って、指標テフラとの同定精度の向上を図った。

(2) 測定結果

屈折率測定結果を第 6 表に示す。A-7 区の試料 2 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は 1.499-1.500 (40 粒子)、試料 1 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は 1.497-1.498 (1 粒子) および 1.499-1.500 (37 粒子) である。また、B-13 区の試料 2 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は 1.515-1.522 (50 粒子)、試料 1 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.500-1.501 (7 粒子) および 1.507-1.5128 (28 粒子) である。

5. 考察

本遺跡において最下位に認められる風化した桃白色火砕流堆積物（A-7 区）は、その層相から約 2.4 ～ 2.5 万年前^{*1} に始良カルデラから噴出した始良入戸火砕流堆積物（A-Ito, 荒牧, 1969, 町田・新井, 1992 など）に同定される。その上位に認められる黄色の凝灰質堆積物（XIV 層, 試料 2）には、形態や色調さらに屈折率などから、A-Ito に由来する火山ガラスが多く含まれていることは明らかである。この堆積物については、火砕サージに由来する可能性も完全には否定できないが、現在のところまだその存在は知られていないことから、A-Ito の水成二次堆積物（いわゆる二次シラス）と思われる。その性格については、さらに周辺での地質調査の実施が望まれる。また、XIII 層（試料 1）中に含まれる火山ガラスについても、屈折率が低い火山ガラス (n : 1.497-1.798) があるものの水和が進んでない可能性もあり、多くの火山ガラスは A-Ito やそれに関係して噴出した始良 Tn 火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995）のそれと一致する。

一方、B-13 区に認められるテフラのうち XII 層中部に含まれている比較的粗粒の橙色軽石については、その層位や周辺での状況から、約 1.1 ～ 1.2 万年前^{*1} に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ（Sz-S, 小林, 1986, 奥野, 1996）、または約 8,000 年前^{*1} に桜島火山から噴出した桜島 12 テフラ（Sz-12,

小林, 1986, 奥野ほか, 2000) に由来する可能性が考えられる。軽石粒子は多くないが、今後、このテフラについて詳細な分析が実施されると良い。

また、X層中の降下軽石層(試料2)については、火山ガラスの屈折率はテフラ・カタログ(町田・新井, 2003)とよく一致するものはないが、約9,400年前^{*1}に桜島火山から噴出した桜島13テフラ(n:1.513-1.516, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 2003, 奥野ほか, 2000)や約7,500年前^{*1}に桜島火山から噴出した桜島11テフラ(Sz-11, n:1.513-1.517, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 2003, 奥野ほか, 2000)のそれと一部重なる。桜島火山起源のテフラについては、まだ屈折率測定例がそれほど多くない状況があり、詳細についてはまだ不明な点がある。また、周辺の遺跡や露頭でのテフラの産状と本遺跡での層相との関係を考慮すると、現段階ではX層にはSz-11が含まれている可能性が高いように思われる。以上のことから、本遺跡で検出された縄文時代早期の遺物包含層(XII層中部～XI層下部)は、少なくともSz-Sより上位で、Sz-11より下位にあると推定される。

なお、K-Ah直下に層位のあるIX層上部の灰色土(試料1)については、色調から約6,500年前^{*1}からK-Ahの降灰後にかけて堆積した霧島牛のすねテフラの下部(Kr-USL, 井ノ上, 1988 早田, 1997, 2006)の可能性が考えられたが、含まれる火山ガラスは屈折率からA-ItoおよびATやK-Ahに由来すると考えられ、特徴的なテフラ粒子は見いだされなかった。今後さらに周辺の露頭や遺跡において調査分析を行い、その色調の由来について調べる必要がある。

6. まとめ

梅北佐土原遺跡において、地質調査を行って土層について記載するとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行った。その結果、下位より始良入戸火砕流堆積物(A-Ito, 約2.4～2.5万年前^{*1})、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前^{*1})、霧島御池テフラ(Kr-M, 約4,200年前^{*1})の一次堆積層のほか、桜島薩摩テフラ(Sz-S, 約1.1～1.2万年前^{*1})あるいは桜島12テフラ(Sz-12, 約8,000年前^{*1})、桜島11テフラ(P11, 約7,500年前^{*1})、桜島3テフラ(Sz-3, 1470年代)などに由来する可能性のあるテフラを検出した。本遺跡で検出された縄文時代早期の遺物包含層は、少なくともSz-Sより上位で、Sz-11より下位にあると推定される。

*1: 放射性炭素(¹⁴C)年代。暦年較正年代との関係を第7表に示す。

【文献】

- 荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物. 地質雑, 75, p.425-442.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器 ^{14}C 年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.
- 井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史. 岩鉱, 83, p.26-41.
- 小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流. 文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者 荒牧重雄）, p.137-163.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）始良 Tn 火山灰（AT）の ^{14}C 年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
- 奥野 充（1996）南九州の第四紀末テフラの加速器 ^{14}C 年代（予報）. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.89-116.
- 奥野 充・福島大輔・小林哲夫（2000）南九州のテフロクロノロジー—最近 10 万年間のテフラ—. 人類史研究, 12, p.9-23.
- 奥野 充（2002）南九州に分布する最近 3 万年間のテフラの年代学的研究. 第四紀研究, 41, p.311-316.
- 重永卓爾（1991）桜島に起源を有する文明 Tephra の年次について. 都城市教育委員会編「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」, p.59-61.
- 早田 勉（1997）風土と自然環境. 宮崎県編「宮崎県史通史編」, 1, p.3-77.
- 早田 勉（2006）都城盆地とその周辺に分布するテフラ（火山灰）. 都城市編さん委員会編「都城市史資料編」, 考古, p.609-629.

第5表 梅北佐土原遺跡におけるテフラ検出分析結果

調査区	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
A-7区	1	++	白	7.1	++	pm>bw	白>淡褐
	2	+++	黄白	5.0	++	pm	黄白, 白
B-13区	1	—	—	—	+++	bw>pm	透明>褐
	2	+	白	2.2	+++	bw>pm	透明>褐

++++：とくに多い， +++：多い， ++：中程度， +：少ない。
 最大径の単位は， mm. bw：バブル型， pm：軽石型.

第6表 梅北佐土原遺跡における屈折率測定結果

調査区	試料	火山ガラス(n)
A-7区	1	1.497-1.498, 1.499-1.500
	2	1.499-1.500
B-13区	1	1.500-1.501, 1.507-1.512
	2	1.515-1.522

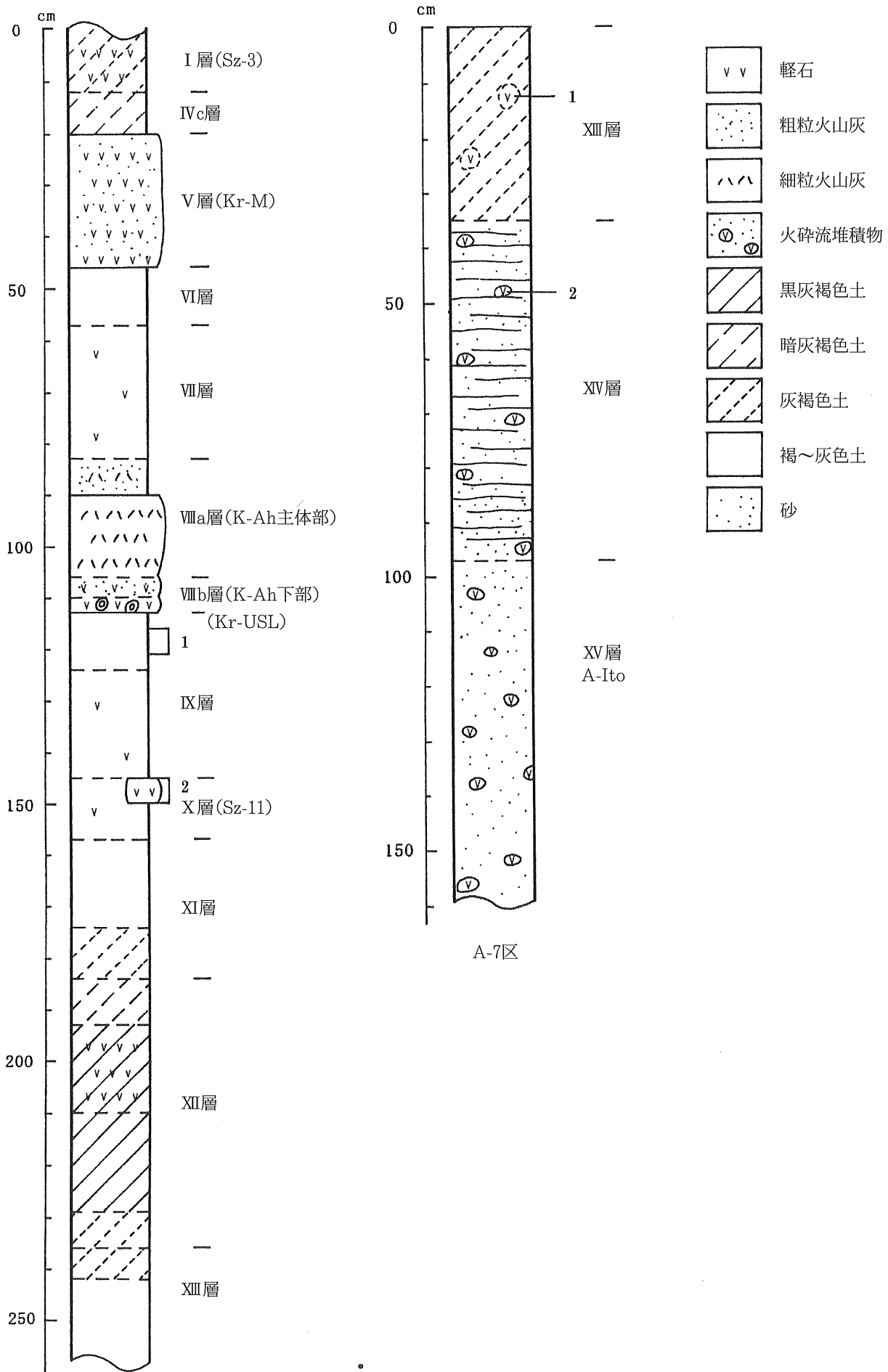
屈折率の測定は， 温度変化型屈折率測定法（RIMS2000）による。

第7表 梅北佐土原遺跡に関するテフラの放射性炭素(¹⁴C)年代と暦年較正年代

テフラ	放射性炭素年代(¹⁴ C) *1	暦年較正年代 *2
霧島御池(Kr-M)	4.2	4.6
鬼界アカホヤ(K-Ah)	6.3	7.3
霧島牛のすね下部(Kr-USL)	6.3~6.5	7.3~7.6
桜島11(Sz-11)	7.5	8.0
桜島12(Sz-12)	8.0	9.0
桜島13(Sz-13)	9.4	10.6
桜島薩摩(Sz-S)	11~12	12.8
始良入戸(A-Ito)	24~25	26~29

*1：単位は， k.yBP. (1,000年前：西暦1950年より).

*2：単位は， ka (1,000年前：現在より). 早田(2006)をもとに作成.



B-13区

第18図 梅北佐土原遺跡 テフラ分析土層柱状図

第5章 まとめ

第1節 縄文時代早期の遺物について

縄文時代早期の遺物は基本土層のⅨ～Ⅻ層から出土している。土器はⅪ～Ⅻ層において出土しており、縄文早期前・中葉期のものである。全体の出土数は少ないが、複数型式にわたる土器が出土しており、器形や文様構成からⅠ～Ⅵ類に分類を試みた。量的にはⅢ類に分類した吉田式土器が最も多い。

Ⅰ類に分類した土器群は別府原式土器に相当する。当土器型式は、かつて「前平式系土器」などと呼ばれてきた土器であり、最近の研究により整理され、型式設定された土器群である^{註1}〔上杉2004、金丸2004、重留2004〕。これらの研究によると、別府原式土器は3～4段階に細分が可能であり、その編年的位置づけは概ね早期前葉期とされている。しかし、他系列土器との併行関係、特に貝殻文円筒形土器系列との相互関係については、早期前葉という時間幅の中で研究者により位置づけがそれぞれ異なっており、定説をみていない。本遺跡においても、この問題に関して確実な例証となるような出土状況を提示することはできないが、吉田式土器と別府原式土器が狭い範囲で伴出していることは、両者の関係性を考える上で興味深い。しかし、全体的な出土量が少ないことや、流れ込みと思われる資料が存在することからも、この出土状況がそのまま時期差や併行関係などを反映するものとは断定できないことを明記しておきたい。

Ⅱ・Ⅲ類に分類した土器は吉田式土器に相当するものである。Ⅱ類の土器については、小破片である上にかなり磨耗しているため文様・調整など判然としない部分もあるが、粘土紐貼り付けによる楔形突起を有していることからⅢ類よりも古手の資料だといえる。Ⅲ類は口縁部が遺存するものと胴部や底部のみの資料があるが、文様構成からは概ね同一段階のものと理解できよう。土器の出土量からみれば、この時期に遺跡のピークがあったものと考えられる。

Ⅳ類は下剥峯式土器に相当するものである。胎土の違いから二個体分があるものと思われる。器面に施された文様からはこれらの資料に時期差があるのかは判断することはできない。15は金雲母と白色砂粒を胎土に含み非常に脆い資料である。このような胎土は下剥峯式・桑ノ丸式・辻タイプ・押型文土器といった早期中葉期の土器に多く見られる特徴で、都城市内でも堂山（南地区）遺跡、加治屋B遺跡、岩立遺跡などで金雲母が胎土に含まれている土器が出土している^{註2}。これらの金雲母が含まれる土器は概して褐色系を呈していることが多い。異系統土器の胎土の色調やそこに含まれる鉱物が類似するということは、器形・文様の共有と同様に複数系統の土器の共時性を示す可能性がある。当然のことだが、器形や文様構成だけではなく、胎土の色調やそこに含まれる鉱物の違いについても詳細な検討が必要である。

Ⅴ類は縄文が施される資料である。早期に属する土器型式のうち縄文が施されるのは平楯式など早期後葉期のものが多い。本類は二点のみの出土であり、しかも小破片のため全体の器形や文様構成が判然としないものである。上述の早期後葉期の土器の他に押型文土器に伴う縄文施文土器の可能性もあるが、いずれのものかは判断が難しい。

Ⅵ類は1点のみで、しかも後世の遺構内埋土から出土している。外器面に変形捺糸文を横方向に施文している。やはり小破片のため器形などは判然としないが、他遺跡で出土した資料をみると、器形は胴部が大きく張り口縁端部に向かい強く外反しながら立ち上がる資料が多い。そのため、押型文土器の中の新しい段階に伴うものである可能性が高いと考えられる。

次に型式ごとの出土状況をみると、吉田式や別府原式など早期前葉期のものは調査区東側から、早期中葉期である下剥峯式土器は調査区西側から出土している。しかし、先述のように全体的な出土量が少ないことから、これが遺跡全体の傾向を反映しているものとは即断できない。

石器については、調査区東側のみから出土している。調査区が狭いながら、石鏃や剥片などが合計36点出土している。石鏃が4点出土しているものの、この時期の石器組成を成すであろう敲石・磨石・石皿といった植物加工のための石器は1点も出土していない。調査区の範囲が限定されていたことを考えれば、これがそのまま当遺跡での石器組成を示すものではないだろう。これらの石器の帰属時期であるが、出土したのが調査区東側に限定されていることを鑑みれば、早期前葉期のものである可能

性が高い。黒曜石の識別については、今回は肉眼観察による大まかな分類のみであったが、より詳細な産地同定などの分析が必要となつてこよう。

都城市内における縄文時代早期の調査例は決して多くなく、本遺跡の所在する市域南部（中郷地区）でも本調査が実施された縄文早期の遺跡は数えるほどである。今回の調査では調査面積が小さく、出土した遺物・遺構は多くない。しかし調査事例が一つ増えたことは、都城盆地における当該時期の遺跡の様相を捉える上で重要な成果であるといえよう。

第2節 中世について

梅北佐土原遺跡では中世の遺構として溝状遺構が3条、土坑が9基検出されている。調査区が狭かったこともあり、一部が調査区外にかかる遺構がほとんどである。遺物についてはこれらの遺構内より出土したものが主となり、包含層出土の遺物は極めて限定的である。全体的にみても出土遺物量は多くない。遺構に関しても、遺物が出土していないものが多く、時期推定は遺構内に堆積する埋土に依るものが多い。中世の遺構・遺物の時期判定の鍵層となる文明軽石が本遺跡ではほとんど残っていなかったことも、時期推定を難しくしている要因といえる。調査区の土層断面を観察すると、中世の遺物包含層と考えられる基本土層のIV層は東側のみで良好に遺存しており、中央から西側にかけてはすでに後世の削平を受けているため、ほとんど残っていない。しかし、掘り込みの深いものに関しては西側でも検出されており、本来は調査区全体にこの時期の遺跡が広がっていた可能性が高いといえる。

【註】

- 1 この土器群については、これまで「前平式土器」とは異なるものだという指摘もされてきたが〔面高 1988、黒川 2000〕、具体的に型式設定されることはなかった。そのような状況の中、森田浩史・金丸武司の両氏は、宮崎市周辺の遺跡を中心に出土するこの種の土器を前平式土器から分離し、「別府原タイプ」と呼称することを提唱した〔森田・金丸編 2003〕。その後、上杉彰紀・金丸武司・重留康宏の三氏によりそれぞれこの土器群を扱った論考が発表されており〔上杉 2004、金丸 2004、重留 2004〕、上杉氏と金丸氏は「別府原式土器」、重留氏は「前原西式土器」とそれぞれ呼称し、型式設定している。
- 2 堂山（南地区）遺跡および岩立遺跡については、概報と都城市史（資料編 考古）において報告されている〔柴畑 2006、矢部 1991・2006〕。加治屋 B 遺跡（縄文・弥生時代）の報告書は平成 19 年 3 月刊行予定である。また都城盆地の縄文早期遺跡において、下剥峯式・桑ノ丸式・押型文土器といった早期中葉期に帰属すると考えられる土器群の胎土に、金雲母が含まれる事例が多いことについては、柴畑光博氏にご教示頂いた。その後、資料を見学する際には胎土の特徴にも留意した結果、都城盆地以外の地域でも上述の土器群の中に金雲母を含み脆い胎土を有す資料が存在するようである。

【参考文献】

- 上杉彰紀 2004 「別府原式土器」とその周辺『九州縄文時代早期研究ノート』第 2 号 九州縄文時代早期研究会
面高哲郎 1988 「第三章 前原西遺跡の調査」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第 4 集』宮崎県教育委員会
金丸武司 2004 「宮崎における縄文時代早期前半の土器群～別府原式土器の設定～」『宮崎考古』第 19 号 宮崎考古学会
黒川忠広 2000 「南九州貝殻文系土器研究の現状と課題」『大河』第 7 号 大河同人
柴畑光博 2006 「岩立遺跡」『都城市史 資料編 考古』都城市史編さん委員会
重留康宏 2004 「前平西式土器雑考」『九州縄文時代早期研究ノート』第 2 号 九州縄文時代早期研究会
森田浩史・金丸武司編 2003 『鹿村野地区遺跡』田野町文化財調査報告書第 47 集 宮崎県宮崎郡田野町教育委員会
矢部喜多夫 1991 「V. 堂山(南地区)遺跡」『平成 2 年度 遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第 13 集 都城市教育委員会
矢部喜多夫 2006 「堂山遺跡〈南地区〉」『都城市史 資料編 考古』都城市史編さん委員会

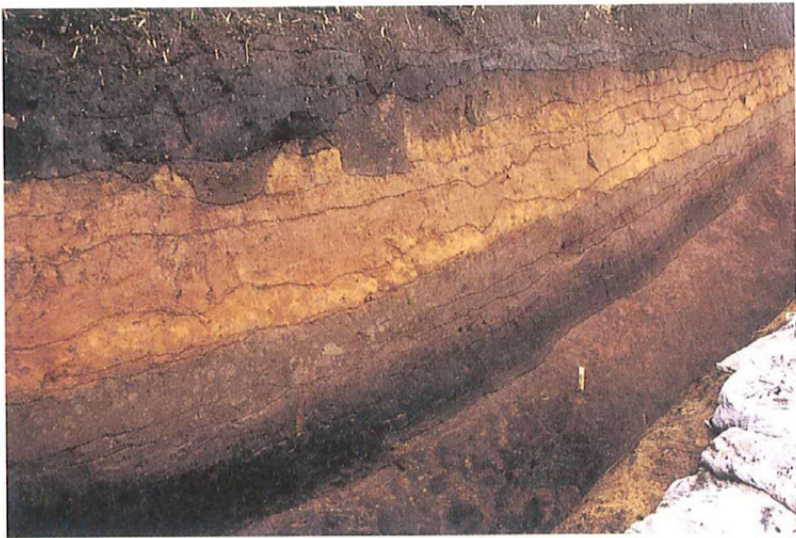
図版1 梅北佐土原遺跡の調査



1 調査前風景（西から）



2 重機による表土剥ぎ作業



3 調査区東側土層堆積状況



4 調査区西側土層堆積状況



5 調査区西端土層堆積状況



6 調査区中央土層堆積状況



7 中世遺構検出作業風景

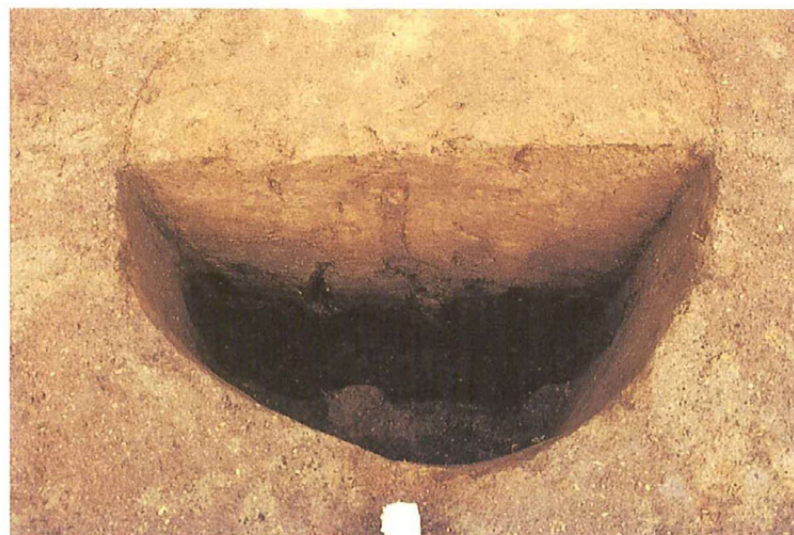


8 XII層掘り下げ作業風景

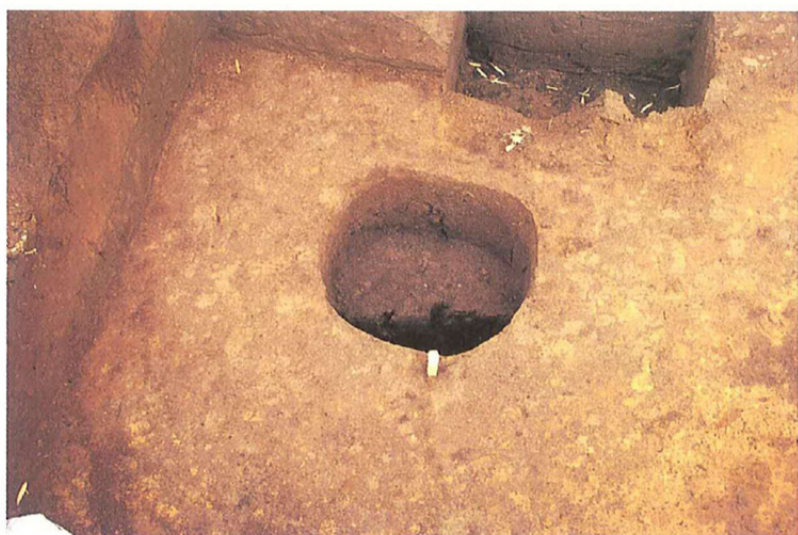
図版 2 縄文時代の調査①



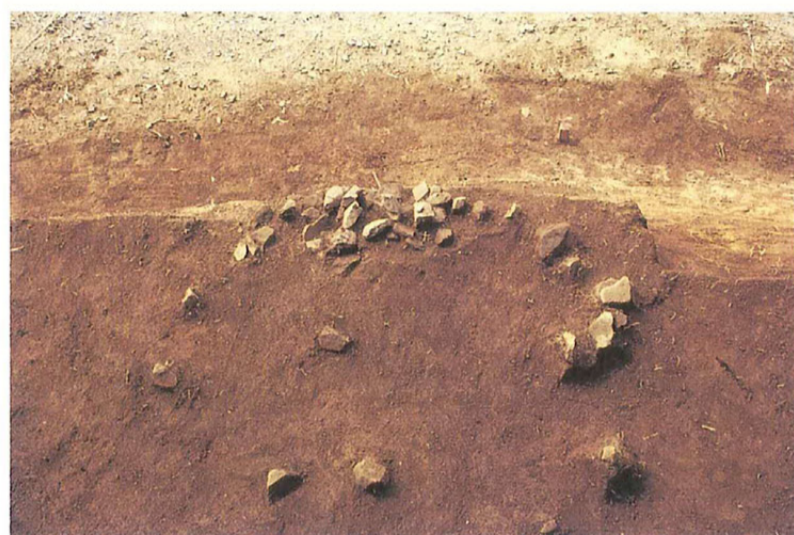
1 JSC1(陥し穴状遺構)検出状況(北から)



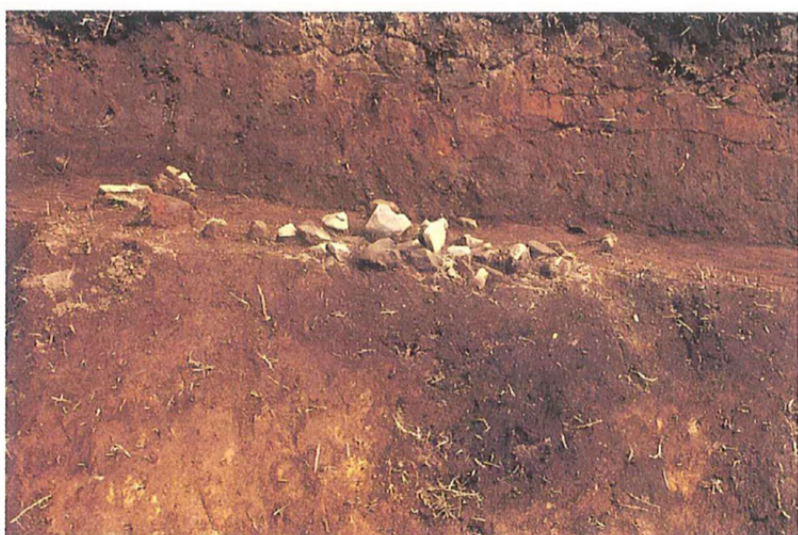
2 JSC1(陥し穴状遺構)土層断面(北から)



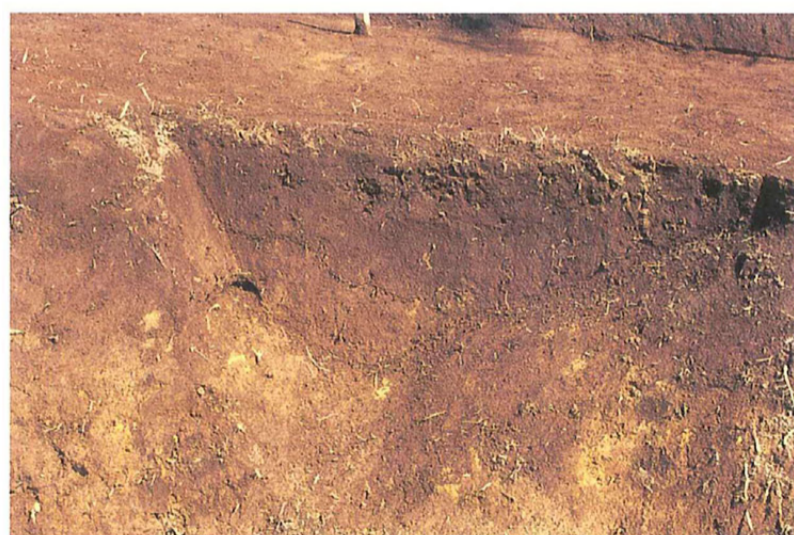
3 JSC1(陥し穴状遺構)完掘状況(北から)



4 SS1検出状況(南から)



5 SS1掘り込み断面①(北から)



6 SS1掘り込み断面②(北から)



7 SS1掘り込み完掘状況①(北から)



8 SS1掘り込み完掘状況②(南から)

図版3 縄文時代の調査②



1 SS2検出状況（北半分・南から）



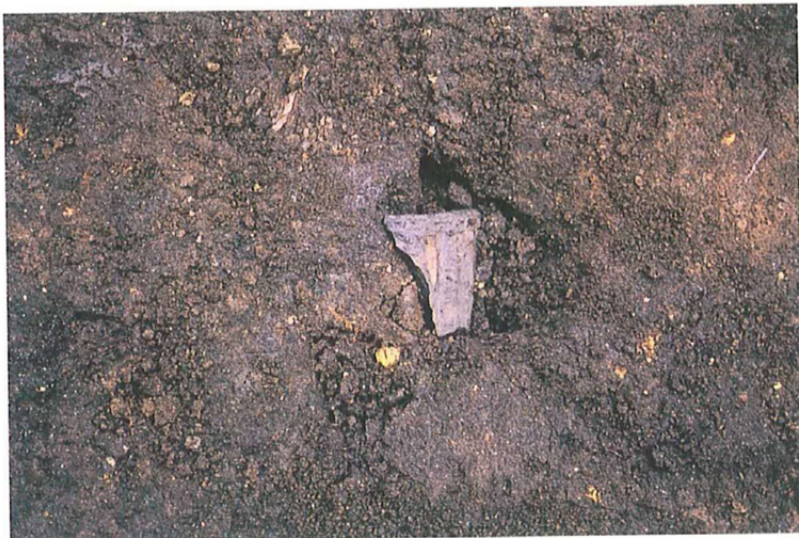
2 SS2検出状況（南半分・南から）



3 I類土器(右・1)・III類土器(左上・7)出土状況（北から）



4 I類土器(2)出土状況（北から）



5 II類土器(5)出土状況（南から）



6 III類土器(8)出土状況（東から）



7 III類土器(6)・石鍬(19)出土状況（北から）



8 石鍬(20)出土状況（東から）

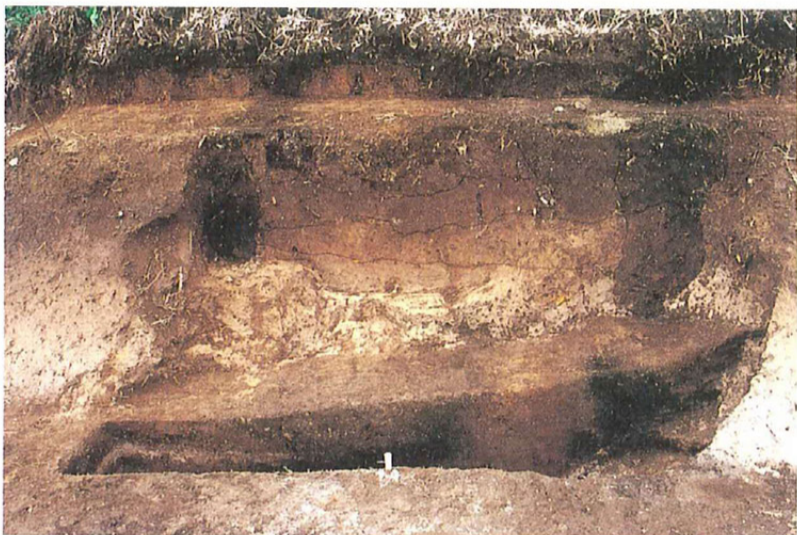
図版4 中世の調査



1 調査区東側遺構(SC1~7)完掘状況(西から)



2 SD1・2、SC8・9検出状況(北から)



3 SD1・2、SC9土層断面(北から)



4 SC8土層断面(北から)



5 SD1完掘状況(西から)



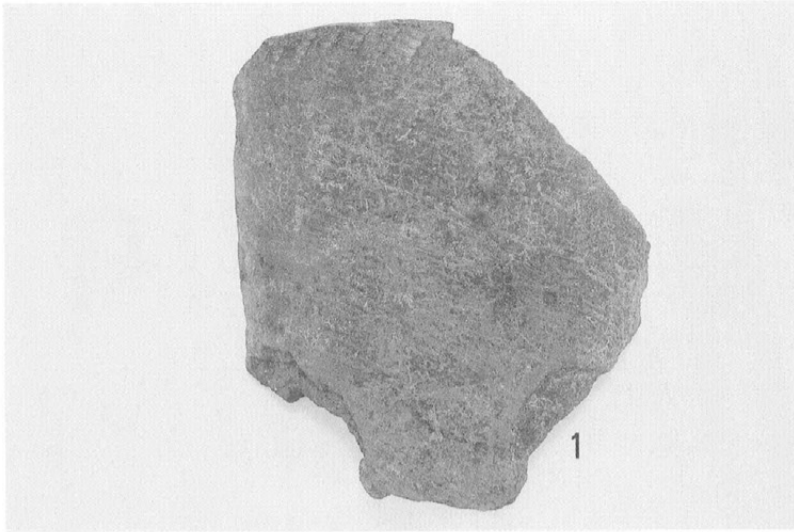
6 SD2・SC9完掘状況(北から)



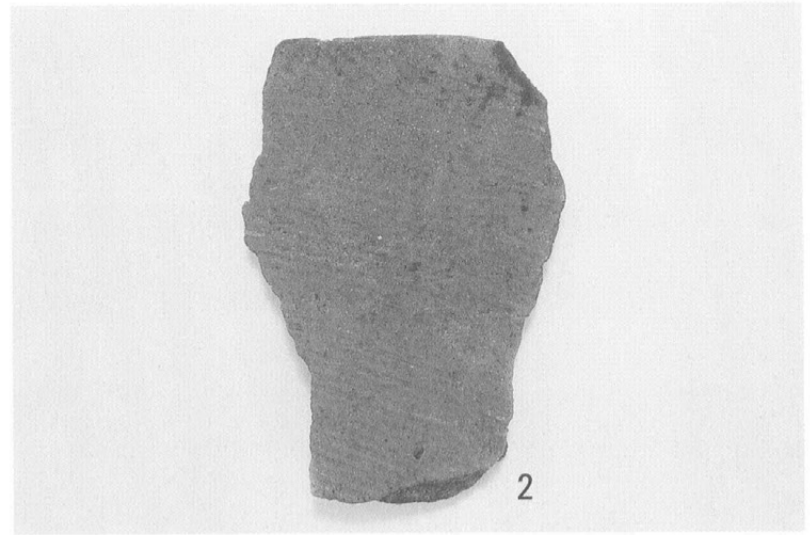
7 SD3完掘状況(西から)



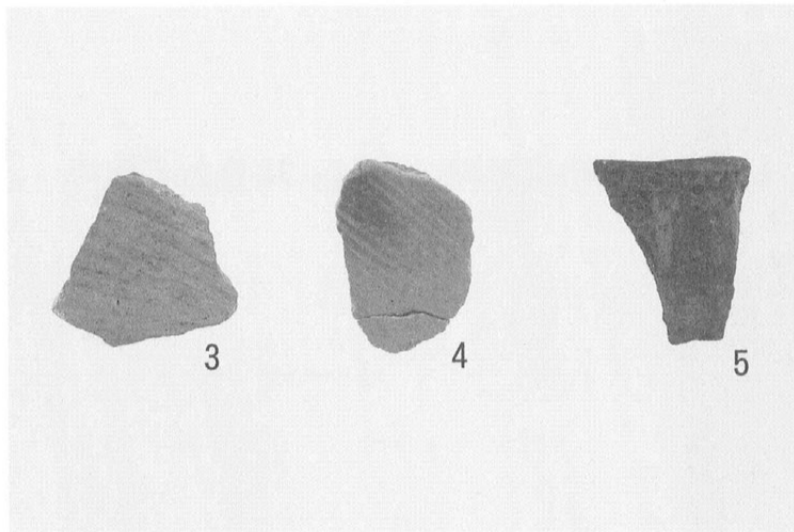
8 SC8完掘状況(北から)



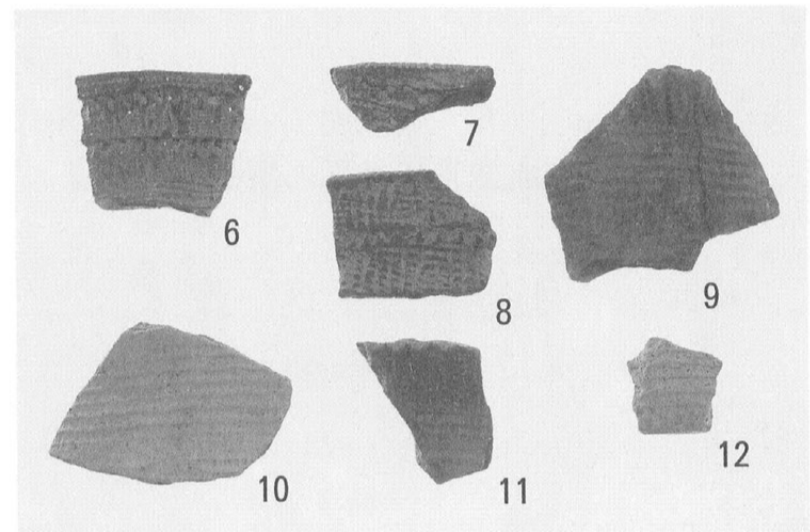
1 縄文時代早期Ⅰ類土器①



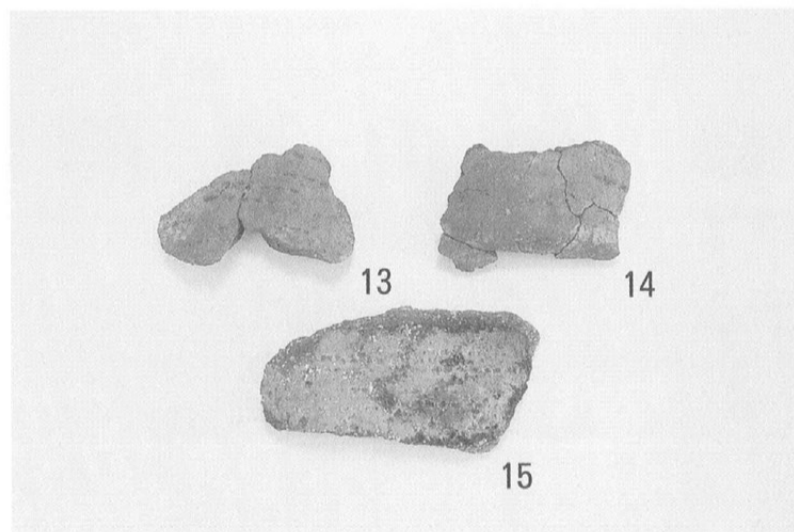
2 縄文時代早期Ⅰ類土器②



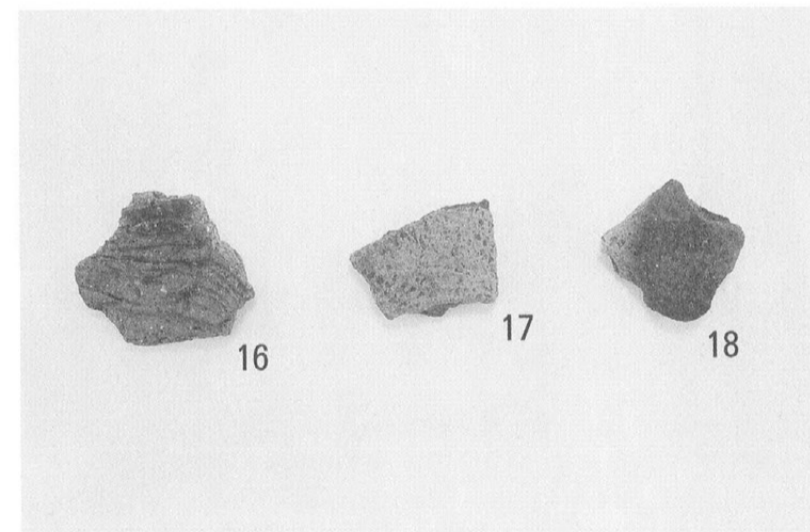
3 縄文時代早期Ⅰ・Ⅱ類土器



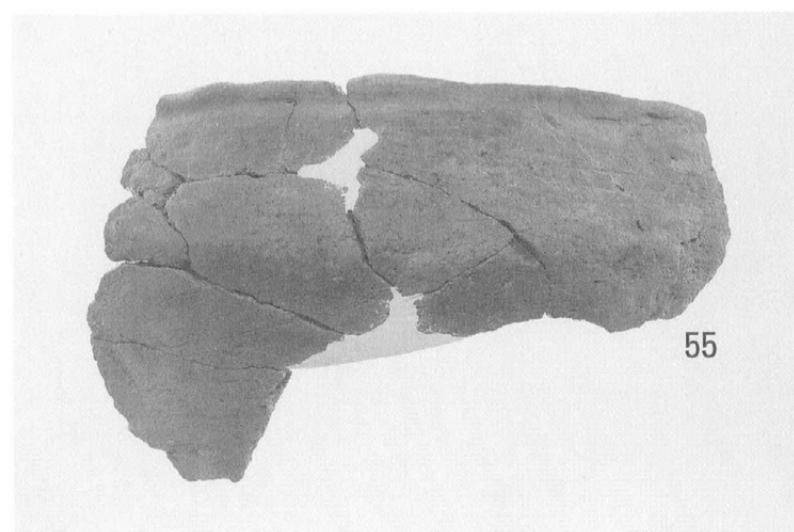
4 縄文時代早期Ⅲ類土器



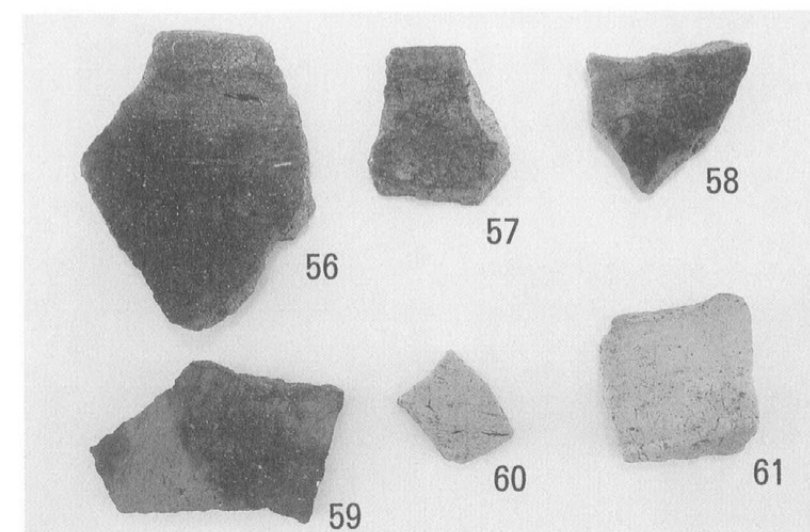
5 縄文時代早期Ⅳ類土器



6 縄文時代早期Ⅴ・Ⅵ類土器

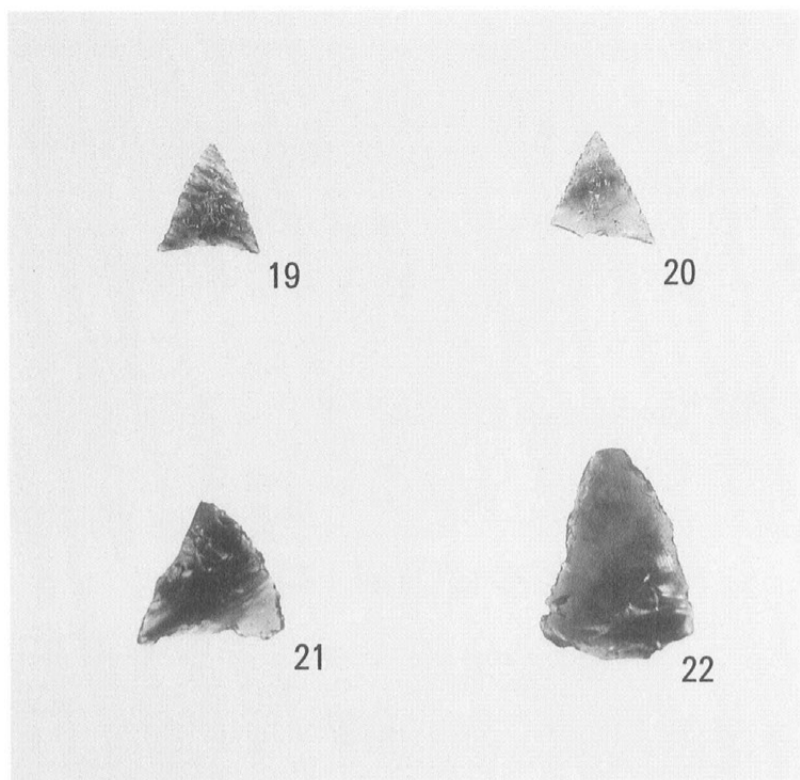


7 縄文時代晩期土器①

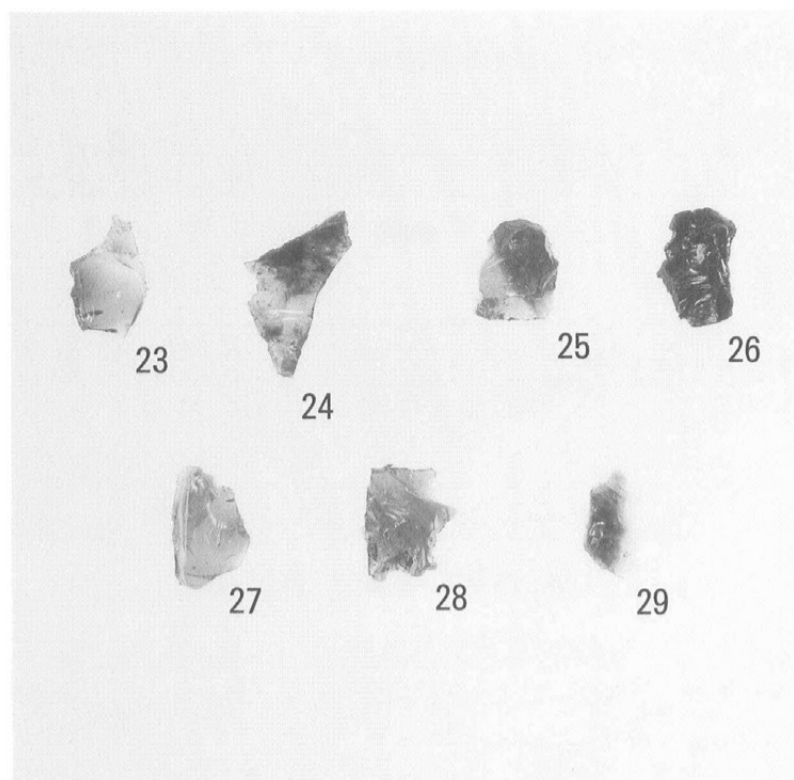


8 縄文時代晩期土器②

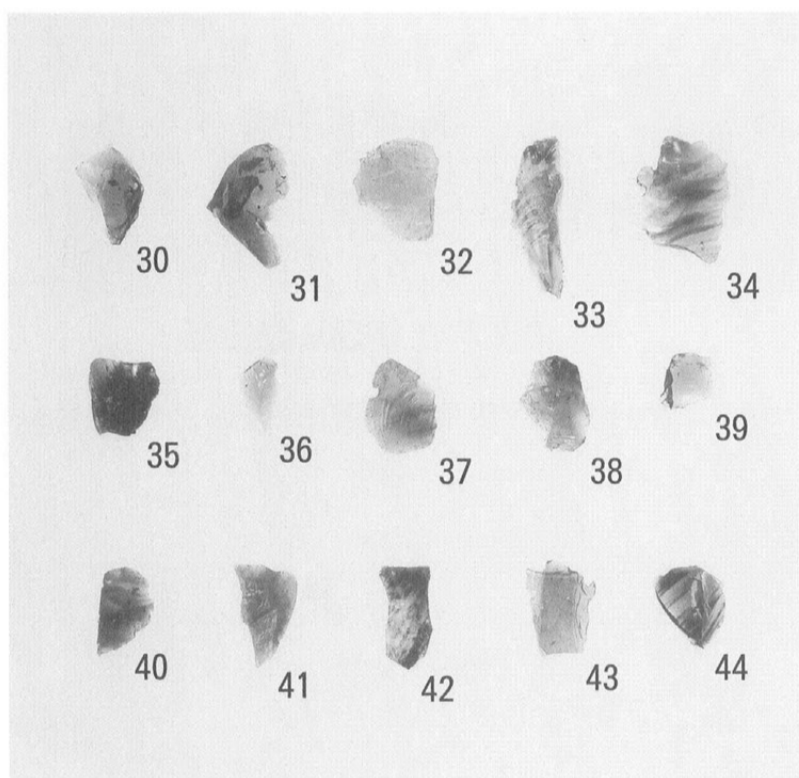
図版 6 出土遺物②



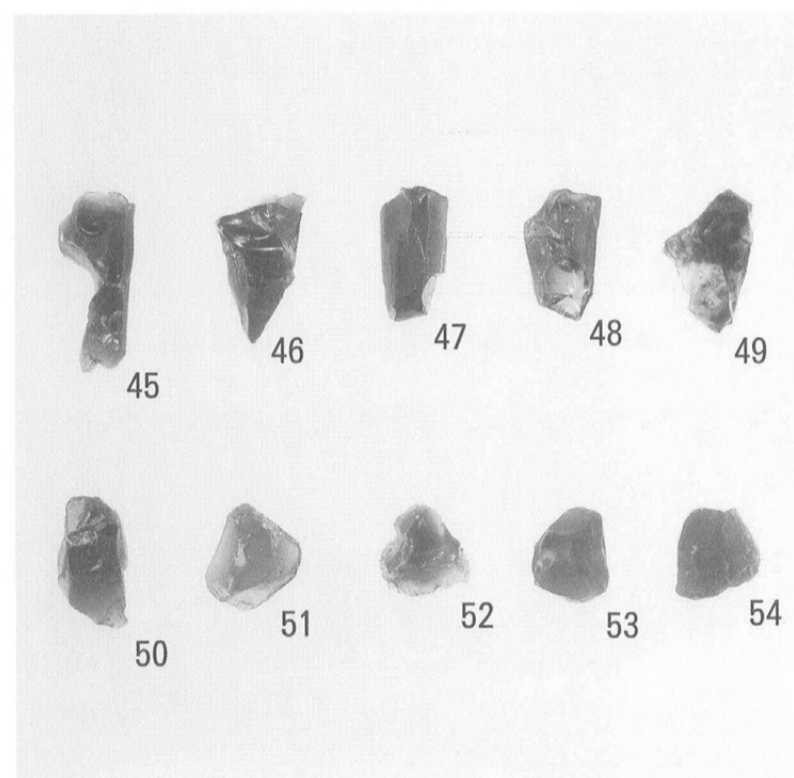
1 縄文時代早期の石鏃



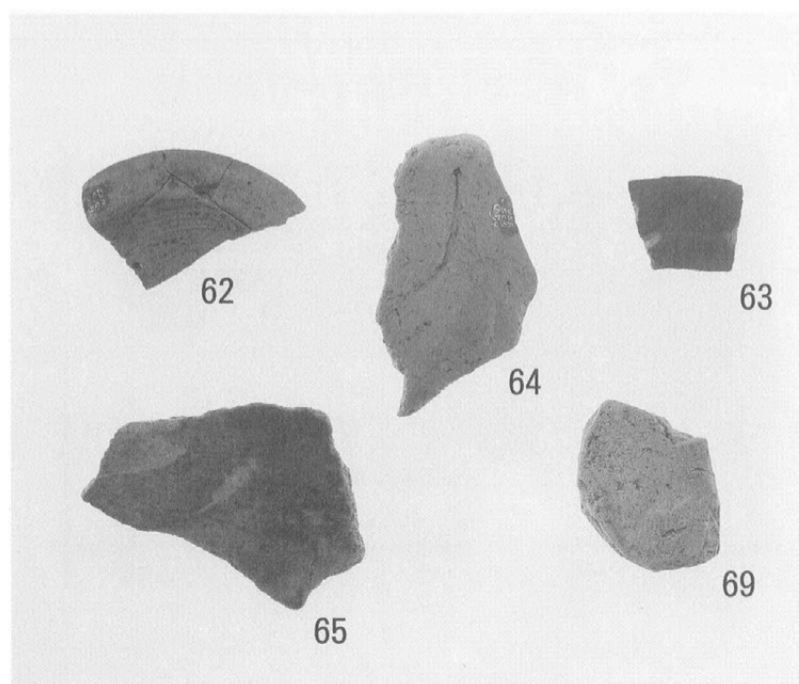
2 縄文時代早期の微細剥離のある剥片



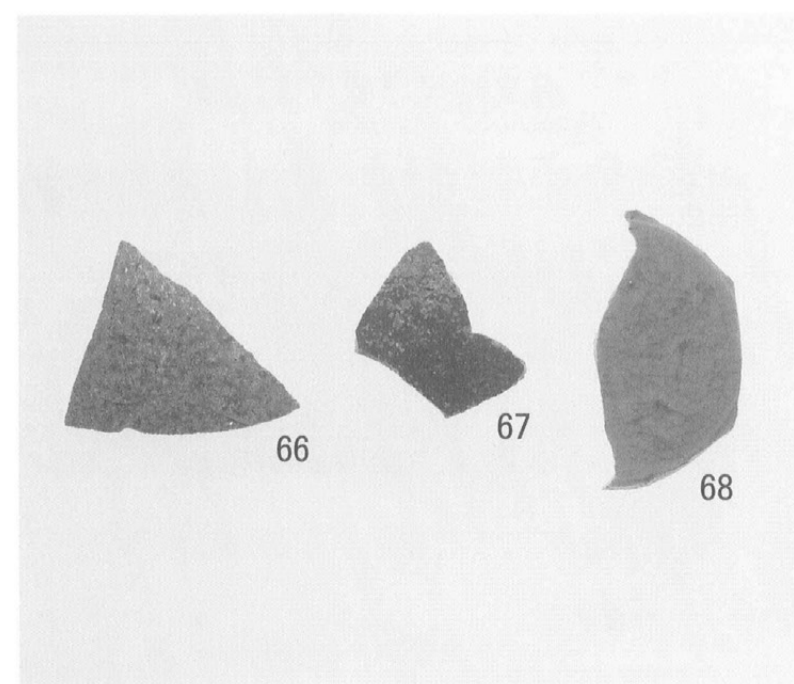
3 縄文時代早期の剥片



4 縄文時代早期の石核・原石



5 中世の土師器



6 中世の陶磁器

報告書抄録

書名	うめきたさどぼるいせき 梅北佐土原遺跡					
副書名	臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第76集					
編著者名	山下 大輔					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	平成19年1月31日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
うめきたさどぼるいせき 梅北佐土原遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 うめきたちょう 梅北町	31° 39' 42"	131° 03' 31"	2006.5.8 ～ 2006.6.30	300 m ²	市道改良
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
うめきたさどぼるいせき 梅北佐土原遺跡	散布地	縄文時代 中世	集石遺構 陥し穴状遺構 溝状遺構 土坑		縄文土器 石器 陶磁器 土師器	

都城市文化財調査報告書第 76 集

梅北佐土原遺跡

－臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2007 年 1 月 31 日

編 集 宮崎県都城市教育委員会
発 行 〒 885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549

印 刷 株式会社 文昌堂
〒 885-0052 宮崎県都城市東町 18 街区 1 号
TEL (0986) 22-1121 FAX (0986) 25-6408